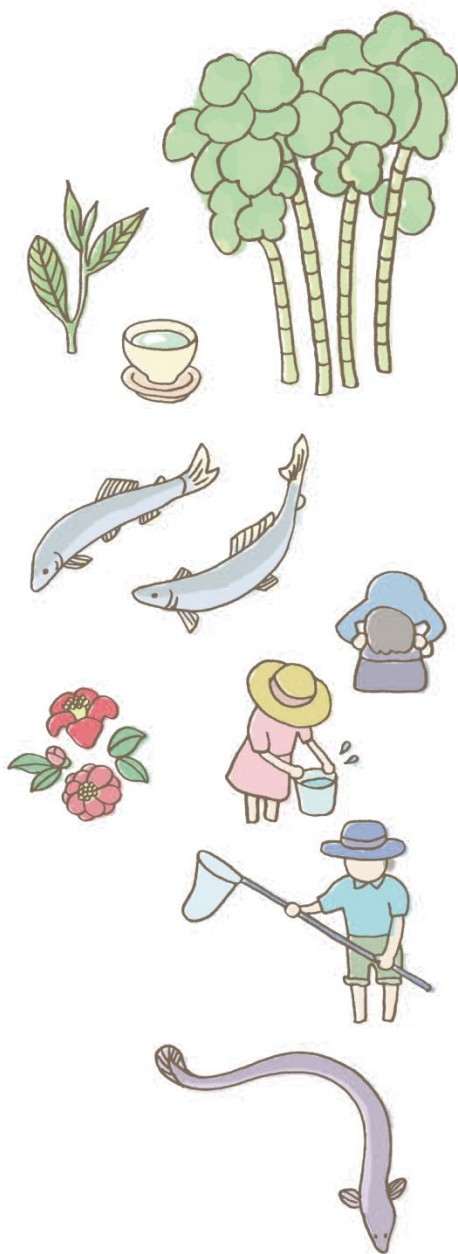




流域圏担い手づくり事例集



矢作川流域圏懇談会

2018年3月

矢作川流域圏懇談会 とは…

長野、岐阜、愛知の3県を流れる矢作川には、矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取組が必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることをめざす「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

流域圏担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、2013(平成25)年度から4年間かけ、矢作川流域で主として中山間地振興に携わる団体(一部川や海の活動団体も含む)の取材記録をまとめ、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を4冊発行しました。この事例集づくりを通じて取材先、取材者、流域圏懇談会の間に新たな交流や企画が生まれました。

5冊目の事例集となる本冊子は、取材先として川や海的环境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、タイトルを「流域圏担い手づくり事例集」と改めて発行しました。この事例集の発行により流域内のネットワーク更に広がり、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードと、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進むことをめざします。



目 次

岐阜県

恵那市

- 1 なつかしい未来の会 1

愛知県

豊田市

- 2 NPO法人あさひ 6
- 3 農家民宿ちんちゃん亭 9
- 4 敷島自治区 12
- 5 合同会社 木かんしゃ 15
- 6 小渡セイゴ水辺愛護会 18
- 7 足助きこり塾 21
- 8 株式会社 山恵 24
- 9 めえープルファーム 27
- 10 里楽暮住しもやま会 30
- 11 矢作川天然アユ調査会 33
- 12 矢作川漁業協同組合中和支部 37
- 13 古巣水辺公園愛護会 39
- 14 橋の下世界音楽祭実行委員会 42

岡崎市

- 15 めかた体験村 45
- 16 有限会社 ファナビス 48
- 17 NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 51

安城市

- 18 NPO法人森を再生する会 56

田原市

- 19 環境ボランティアサークル亀の子隊 59

なつかしい未来の会

調査団体名	： なつかしい未来の会（通称：なつみの会）	団体代表者名	： 代表 堀賢次郎
設立年	： 2015年2月	対応してくれた人の名前	： 堀賢次郎、川上貞夫、 安藤由美子
団体URL	： https://natsukashiimirai-kamiyahagi.jimdo.com/	調査員	： 今村豊 小島徳文 大重隆太郎
活動拠点	： 恵那市上矢作	レポート作成者	： 大重隆太郎
取材日	： 2017年12月25日		

名前「なつかしい未来の会」の由来と活動内容

山里には、自然の恵みを活かして生きていくのに必要なたくさんの「知恵」と「技」、そして「心」のあり方が、受け継がれています。岐阜県恵那市「上矢作町」かつて林業と水力発電で栄えたこのまちには、今も山に生きる叡智を受け継ぐ人たちがいます。その叡智を受け継ぎつつ、あたらしい未来の山里をつくろうと、「なつかしい未来の会」が発足しました（通称：なつみの会）。

木馬（きんま）技術を駆使した木材の搬出を機に、その丸太を製材し、在来軸組工法によるコミュニティハウスづくり、ピザ窯、ツリーハウス等々、活動拠点の「なつみ広場」を整えています。

2017年の活動

3/18 キノコの菌打ち体験イベント：キノコ名人の熊谷さんの指導で約30人の親子などが参加しました。

5/7 親子でスギの皮むき体験：ツリーハウスづくりに向けて杉を間伐し、親子で皮むきを実施しました。

5/27 コミュニティハウスの建て前：設立時から準備を続け、小坂恵那市市長はじめ100名が集うことになりました。

7月～9月 森のピザ窯づくりとツリーハウスづくり：活動拠点の「なつみ広場」がカタチになってきました。

12/24には、ピザを焼いてクリスマスパーティーを開催！ 新年にむけて、門松づくりを体験！

キャッチフレーズ

「山里の知恵と技と心をつなぎ、豊かな未来をつくる」を合言葉に「なつかしい未来の会」が発足

会のモットー（何を大切にしているか）

- ① 森林資源活用の実践と啓発
- ② 山里文化の伝承
- ③ 移住と交流の促進

設立から現在に至るまで変化したこと

堀、川上、安藤が発起人となって開催した「上矢作の森づくりを語ろまい会」をきっかけに設立。その時、堀代表は木馬（きんま）技術を駆使して雪害木を搬出しようとしていたところでした。3人が協力を呼び掛けたところ、地元の有志が集まり、最初の活動となりました。以後、木馬による搬出の協働作業、見学会の開催に続いて、「搬出した木材を活用しよう！」ということなり、地元の堀井工務店さんのご協力により、製材機を借用することがかかないました。同時に退職されたベテランの職人さんの協力、指導により、本格的に製材を行うことになりました。

さらに柱、梁などの製材品を用いて活動拠点となるコミュニティハウスづくりが始まります。今年5月に建前を終え、これから内装と床を整えていきます。他にも楽しい仕掛けのツリーハウス、ピザ窯、ハイジのブランコなどが完成し、現在も山里を楽しむ「なつみ広場」の仲間を募集中です！！

連携している団体・専門家・自治体など

えなの森林づくり推進委員会（事務局：恵那市林政課）、（株）堀井工務店、仙人ren、地域の達人（シイタケ名人：熊谷三善氏、製材名人：中垣省三氏、堀紀晴氏）、恵那くらしサポートセンター

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

様々な活動を通じて、堀代表はじめ、地域の達人の経験と技術を若い世代に伝承していきたい。
門松づくり体験を通じて、意外とほしい人が多く、需要があると気づいた(売れる手ごたえを得た)。他にも地場資源の活用を通じて収入を得て、活動資金としていきたい。

現在直面している課題

- ・シカ、イノシシの増加から獣害対策が必要(山菜用にコシアブラを植栽⇒すぐに食害を受けるなど)。
- ・地域自治区の地域計画との連携が不十分。
- ・枝虫対策など早急な山林保全に具体的な手立てが打てずにいる。

注)枝虫とは: スギノアカネトラカミキリのこと。

スギよりむしろヒノキの枯枝から侵入することが多く、幼虫の食害により製材するとピンホール状の食害跡が目立つ。立木が枯れることは少なく、柱などの製材品では強度的には問題がないが、材価は大幅に下がる。間伐の遅れや枝打ちをしなくなったことによる枯枝の増加が原因と考えられている。

今後やってみたいこと

- ・ヤギを飼い、乳からチーズを作ってみたい。炭窯づくり(木馬で搬出した間伐材を炭にも)
 - ・「なつみ広場」が子供の遊び場として充実してきたので、「プレーパーク」や「森のようちえん」など、若い世代や親子が集えるような活動につなげていきたい。
 - ・「イベントでたくさんの人を集めたい」とは、あまり考えていません。日ごろの活動を通じて、協力者が集い、同時に技術を学べる場にしていきたい。
- 【今後の具体的な活動内容】
- ・森のアスレチック・冒険遊び場づくり!
 - ・コミュニティハウスの床板&内壁はり!
 - ・森のピザ窯を、上矢作の川石で飾ろう!
 - ・炭窯づくり・炭焼き体験

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

山里文化を伝承するため、山の活用技術や里で暮らす知恵などを受け継ぎたいと考える若い世代との出逢いを増やし、参加してもらえるようにしたい。子どもたちに山里に親しんでもらい、山里に生きる知恵と技を学んでほしいので、親子での参加を促したい。とりわけ、田舎への移住を考える方には、ぜひ体験に訪れてほしい。また、同じ理念や目的を持った団体との交流などを通じて、技術、知見を深めていきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

「なつみ広場」の土地はどうやって確保したのか。

<答え>

昔はお寺であった土地。現在は不在地主のため、日頃の草刈りなどをすることを条件に自由にに使わせていただいている。隣接して10ha程の森林もあるので間伐もしていきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

活動資金の確保の苦労は？

<答え>

コミュニティハウスづくりに関して、市の助成金とクラウドファンディングサイトを活用して寄付などを呼び掛けた。その結果、直接の寄付を含め、約60万円の資金が集まった。総勢72人、うち具体物でのリターンをお渡しした方は1割ほどで、他は活動の趣旨に賛同していただいたの体験への参加と無償の寄付であった。この資金を元手に地元大工（棟梁）に発注できた（基礎工事などのできることは指導の下、自分たちの共同作業で実施）。これから内装などを整えていきたいが、資金不足により、資材購入などに苦労している。市、県の助成制度も活用したいが、地域自治区との連携不十分で活用できなかったり、事務局の力不足で活用に踏み切れなかったりしている。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

活動（資金確保）をしやすくするため、NPO法人化してみては。

<答え>

現在、主要なメンバーは5人で、人数も少なく、PCを使わない世代が中心のため、煩雑な事務や情報発信が充分に行えない状況にある。役割分担が可能な若いメンバーが加わらないと現時点では難しいと考えている。

その他、伝えたいこと

○木馬（きんま）技術と小屋づくり（なつみの会HPより引用）

かつて重機がまだ普及していなかった頃、山からの木の搬出は馬か牛、または木馬（きんま）と呼ばれるソリを使い人力で行って来ました。かつては、山にその木馬が通るための木馬道がずっと続いていました。

木馬での搬出は、山仕事の中でも最もケガも多く、死者も少なくない危険を伴う労働です。しかしながら、人力だけで重機にも匹敵するような力で、重い木材を、非常に効率よく搬出することができる驚くべき知恵と技の結晶でもあります。

そして、木馬を曳いた経験のある方は、もうほとんどが70、80代となっしまい今にも消え去ろうとしている文化遺産的価値のある森林技術です。その木馬道を、70年近く山仕事をしてきた本団体の代表の堀は、せっせと冬中かけて記憶をもとに復元したのです。そして、実際に一緒に山へ行った会員に、木馬を曳いて見せてくれました。その代表も、現在85歳。いつまで私たちに木馬道づくりと木馬曳きの技を伝授してもらえるか分かりません。

「なつかしい未来の会」では、代表の堀が伐り、木馬で搬出した材木を、地元に唯一残る製材機でかつての技能職工の方に挽いていただき、地元の棟梁の指導の下で、共同作業で小屋づくりをしています。小屋づくりの過程すべてが、貴重な林業技術および木材加工技術の継承活動であり、完成した小屋がその後の地域の技術継承の場また多世代共創型の地域の居場所「コミュニティハウス」となるようにと考えています。

○堀代表の体験談や昔の矢作川水系の豊かな自然とその恵みのお話を興味深く、拝聴した（以下のとおり）。

戦後のいわゆる「拡大造林」により、特にこの上矢作地域では、スギ、ヒノキを植えすぎたことや、先人の教えを無視して、不適地にまでそれを行った。そして、材価の低迷により、間伐材が搬出されず、利用されず、間伐などの手入れが遅れ、結果、枝虫被害の広がりや風雪での倒木林の放置など山が荒れたままになっていることを危惧している。

また、下流にできたダムの影響により、アユなどが遡上できなくなった。昔の矢作川は普通にウナギが獲れる自然豊かな川であった。アマゴも少なくなった。魚道ではなく階段型のダムや堰堤の工夫によって、遡上率を上げられないだろうか。また、下流に下る習性のないイワナなら増やせるかもしれないと考えている。

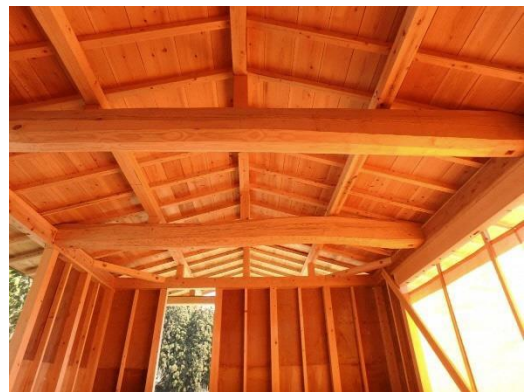
写真



概要説明の様子



堀代表(製材所にて)



コミュニティハウス(これから内装などを整えていきます)



ツリーハウス

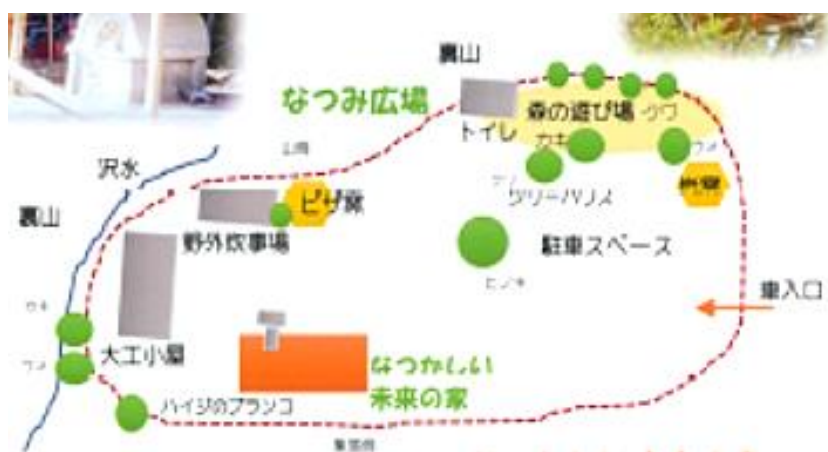


ピザ釜



「木馬(きんま)」による人力での木材搬出の様子

(2015年撮影 : 岐阜県恵那市上矢作町)



「なつみ広場」の概略図

「なつかしい未来の家」は
コミュニティハウスの名称

2. 2017年度前半の活動

◆ 3/18 キノコの菌打ち体験イベント



2017年は、「森に親しみ、森の恵みを活かす知恵を伝える」がテーマとなる活動を続けています。

キノコ名人の熊谷さんにご指導いただいたキノコのほだ木づくりイベントでは、30人以上の参加者で大人も子どもも楽しく頑張りました。

町内からも町外からも、多くの千カウを借りて実現した現代の「結」のような「建て前」。山で木を伐るところからスタートした「森の遊び場」ツリーハウスづくり。たくさんの方が活動に参加してくれました。

◆ 5/7 親子で杉の皮むき体験



◆ 5/27 コミュニティハウス建て前



ピザ窯づくりでは、毎週末のように準備とご指導に足を運んでくださった奥野さん、ピザ窯仲間が少しずつつながり始め、10月に完成祝いを迎えます。

◆ 7月～9月 森のピザ窯づくり



◆ 7月～9月 ツリーハウスづくり



NPO法人あさひ

調査団体名	: NPO法人あさひ	団体代表者名	: 山内 貞
設立年	: 2005年	対応してくれた人の名前	: 山内 貞、矢田亜弥
団体URL	: http://www.ikomahausu.com/	調査員	: 洲崎燈子
活動拠点	: いこまハウス(豊田市牛地町西久保)	レポート作成者	: 洲崎燈子
取材日	: 2018年1月12日		

活動内容

現在9人のスタッフで「いこまハウス」と「笹戸ハウス」を運営している。名前の由来は活動地の合併前の町名(旭町)から。

いこまハウス(1998年～)…廃校になった小学校で毎日、障害のある人たちのための自立支援を行っている。敷地内外の物を原料にして堆肥を作り、自家消費用の野菜を育てる。近隣に自生するオニグルミの実を取って地元のお菓子工房に卸したり、殻をグッズに加工する。園芸、しいたけづくり、竹細工も行う。愛知県内全域の10～50代の人たちが笹戸ハウスを利用しながら活動している。日々の活動によって利用者の情緒が安定し、健康が維持されることをめざしている。自然の中で活動する効果を実感している。

笹戸ハウス(2002年～)…いこまハウス利用者のための共同住居施設。元はホテルだった建物を使用。敷地内には「小さな森の販売所」を併設し、全国のご当地カレーやご当地ラーメン、いこまハウスで作った園芸作品・クルマグッズなどを販売している。

この会を始めたきっかけ

代表の山内さんは20代の時に福祉の業界に入り、いろいろな疑問を持つようになった。その疑問を解消するために現在の事業形態を考案し、実現に向けていろいろ勉強した。1997年に廃校になった生駒小学校を利用したいと旧旭町に交渉して、借り受ける了承を得ることができた。1998年に入って電気、ガス、水道も通っていない校舎に半年素泊まりしながら、活動を始める準備をした。

会のモットー(何を大切にしているか)

会のモットー

会を運営するにあたりこだわりはない。障害を持つ人やその家族が、いつまでも心身ともに健康でいられるように、運営体制も活動内容も情勢に合わせて変えていく。



いこまハウス



笹戸ハウス

設立から現在に至るまで変化したこと

①当初は障害を持つ方々やそのご家族に、いつでも気軽に利用でき心身ともにリフレッシュして頂けるように、レスパイト事業としてオープンした。当時は福祉作業所や学校を終わった人たちも利用していて、夕食を提供し家庭に送り届ける活動もしていた。24時間365日営業し、昼夜を問わず連絡があれば送迎した。スタッフもいこまハウスで生活し、利用者と共に寝泊まりしていた。その後様々な問題を抱え、家庭でも施設でも介助できない状態の人たちの宿泊が多くなってきたので、日帰りの活動部分を2002年に名古屋の会社に移管した。

長期間宿泊する利用者が増え、いこまハウスはもともと学校なので、短期間寝泊まりするのであればストレスもたまりにくいですが、長期間教室で寝泊まりするのは問題があり、宿泊の部分をホテルだった笹戸ハウスに移した。現在笹戸ハウスといこまハウスをマイクロバスで移動している。

②当初、いこまハウスは健常者と障害者の人たちが共存できる居場所づくりをめざし、キャンプや合宿など宿泊利用できるように並行して行っていたが、健常者の人たちが利用できる宿泊施設として許可を得るには問題が多すぎて（同じ人間なのに、障害者と健常者の宿泊施設が違うのは不公平ですよ）、福祉事業に絞って行うことにした。

連携している団体・専門家・自治体など

杉ん工房（同じ旧旭町内で地元の食材でお菓子を作っている女性グループ）

現在直面している課題

①入所施設はどこもいっぱいではなかなか入れず、多くの方が入所待ちをしている。グループホーム・ケアホームもできてはいるが、すぐにいっぱいになり、それを支える職員もなかなか見つからないのが現状。特に障害の重い人たちはどうしても敬遠されがちで、そういった方々が時々面接に来るが、私たちも厳しい現状に立たされているので、全ての方のニーズに応えられなくて申し訳なく思っている。

②高齢化していく障害者の問題。親がいなくなった後、どのような体制にしていくのかが大きな課題。

今後やってみたいこと

自立した運営をしていくために、様々なプロジェクトを考え用意していく。待機している障害者・親がいなくなった後の体制、全て法人が自立できれば解決できる問題なので、そのために努力し続ける。

法人が、末永く続いていくことを願っている。

その他、思うこと

私は毎日、何をやっているのかな？役に立っているのかな？と思います。

約20年の間には、もっともっと様々な出来事がありました。当初はお金がなく、給料も払えないような期間もありました。ここでは言えないこともたくさんあります。多くの方が、最後には幸せな人生であったと思って...



乾燥中のくるみグッズ(クリップ)



ホームページトップ

奥矢作いこまふるさとまつり(2016.9.19)



農家民宿ちんちゃん亭

調査団体名	農家民宿 ちんちゃん亭	団体代表者名	鈴木啓佑・桂子
設立年	2015年8月	対応してくれた人の名前	鈴木啓佑・桂子
団体URL	https://tinchantei.eyado.net		
活動拠点	豊田市押井町寺ノ入4（旭地区）	調査員	曾我部行子、近藤朗、庄司知生、浜口美穂
取材日	2017年12月18日	レポート作成者	浜口美穂

活動内容

桂子さん（けーちん）と啓佑さん（けーちゃん）の結婚を機に始めた農家民宿の名は「ちんちゃん亭」。2人が出会うまでのそれぞれの活動や人間関係、出会いの場、そこでの交流があって今のちんちゃん亭がある。その長い物語のほんの一部を紹介する。

●それぞれの活動・仕事

桂子さん・・・「おひさまくらぶ」の立ち上げ、仲間たちと「とよたプレーパークの会」の立ち上げ、green maman（事例集Ⅰ掲載）、脱原発活動、長く使い続けられるおもちゃを扱うおもちゃ屋、おもちゃコンサルタント、温熱刺激療法イトオテルミー療術師など多方面で活躍。一方、当時の結婚生活は、互いの夫婦観の相違のため離婚。

啓佑さん・・・街中の再開発ビルを運営・管理する会社のサラリーマンだったが、2012年に脱サラし、地元の集落営農組合のオペレーターをやりながら米作りを始めた。脱サラの大きな理由は次のようなもの。①地域リーダー養成講座の市職員向け講習に参加した時、足助・新盛地区の今後の人口シミュレーションを見せられてびっくり。ふるさとを差し置いて街中の活性化をやっている場合じゃないと感じた。②莫大な税金をつぎ込んだ再開発。でも、元々そこにあった下町のコミュニティにとってよかったのかという疑問。③家族のように大切にしていたセキセイインコが病気をした時に会社を休んで病院に連れていった。それを上司に「公私混同」と言われ、「大切な人に寄り添えるような生き方をしたい」と思った。

●出会いの場

千年委員会。啓佑さんは、持続可能な社会をつくろうと利他的に活動している大人たちの存在に驚いた。経済システムのひずみが様々な問題を生み出していることを知り、地元で活動していた「おむすび通貨」（事例集Ⅰ掲載）を手伝うようになる。桂子さんは、脱原発が当たり前の空気の中で「（原発がいいか悪いか）ぶっちゃけわかんないですね」と言った啓佑さんのことを「長いものに巻かれない、正直な人」だという印象を持った。

●2014年11月 入籍

啓佑さんは、自分の守るべきもののために行動するgreen mamanの女性たちを見て、結婚するならこのような人だと思いパートナーを探していたが、「たまたまgreen maman本人に空きが出て」、入籍。

●2015年8月 ちんちゃん亭開業へ

啓佑さんが里を守るための集落営農をしながら続けられることや、桂子さんが子どもの頃から「人がわらわら出入りする長屋のような暮らし」に憧れていたこと、現金収入がすぐに得られることなどから、農家民宿を始めることに。啓佑さんの実家のはなれをリフォームして開業。

●経営方針は「とにかく偏りまくる」

啓佑さんも桂子さんも様々な仕事を複合的にこなす。自分たちが心地よい暮らしを求めていたら「一つのものに依存しない暮らし」に行き着いた。だから無理はしない。政治的な偏りもプライベートもFacebookで発信。2人の価値観に共感してくれる人が来てくれればよいと思っている。

●こだわりの詰まった民宿

・食・・・桂子さんがこれまで子どものためにできるだけ安全で手作りのものを食べさせたいとやってきたことがベースになっている。お米は啓佑さんが育てたミネアサヒ（矢作川源流の湧き水使用、除草剤を初期1回のみ使用）、味噌は完全オーガニックの手前味噌。料理に化学調味料は使わない。

・住・・・県内産天然乾燥の木材、化学物質99%フリー建材、壁は九州産火山灰を使用した漆喰、リサイクルウールの断熱材、一部オフグリッドの太陽光発電、松園式燃焼ユニット薪ストーブ（「木かんしゃ」参照）、アレルギー対応寝具、等々。

●イベントが充実

お客さんが講師になることが多い。「あさやんのイノシシ解体からの『丸ごと食べちゃおう!!』」「聴くトレーニング『澄まし処（か）』」「まくのうちセラピー」など多数。特に、「ちんちゃんコン」は、日本一の合コンと自負している。

キャッチフレーズ

ふるさとのような居心地の良い場所を目指しています(毎月発行しているおたよりのキャッチコピー)

会のモットー(何を大切にしているか)

家庭も地域も、一番大事なのは、「自分がここにいてもいいと思える場所」と「人と人のつながり」。その両方がある、ふるさとのような場所になりたいと思っている。

例えば、毎月実家に帰るようにして来てくれる常連さんがいる。一人暮らしの中年男性だが、来るたびに掃除や、他の宿泊者に施設案内するなど、手伝ってもらっている。その人が役立つ場所、存在意義が感じられる場所になっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

お客さんが講師になるので、イベントの数が増えていく。これからどんな出会いがあるかわからないので、どんな化学変化が起こるか楽しみ。

連携している団体・専門家・自治体など

つながりで成り立っているから、書き切れない。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ・ちんちゃん亭に行けば、いなか暮らしのエッセンスを見つけられる。人・本・情報との出会いがある。移住希望者が泊まりに来ることも。
- ・地域の交流拠点にもなっている。2016年には地域の新年会も開催。老人会の会合も行われる。
- ・啓佑さんは、あさひ若者会(事例集Ⅱ掲載)の代表を務めている。

現在直面している課題

桂子さんの健康が民宿を続けられる条件なので、健康維持に気を配る。将来、親の介護の必要が生じたときは民宿業は縮小するつもり。何が何でも民宿を続けなくてはいけないとは思っていない。

今後やってみたいこと

目指すことは何もない。夫婦2人の生活を壊してまでやろうとは思わないので、無理なく、楽しくやれる程度にお客さんが来てくれることを望んでいる。

チームオリジナルの質問

<質問内容>日本一の合コンの内容を教えてください。

<答え>

まず、参加条件は、「いなか、農業、動物、子ども」に興味ある人。1泊2日のスケジュール。事前に「10年後にどんな暮らしをしたいか」を聞き、各プロフィールを冊子にして当日配布する。

1. 夕食後に3分間の自己PRタイム。なぜちんちゃんコンに参加したか赤裸々に話してもらう。「なぜ今、恋人がいないか」など。
2. 次の日は内観する時間。愛を感じる5つの条件「時間」「サービス」「スキンシップ」「言葉」「ギフト」の優先順位を理由も添えて発表。
3. 「余命1年と言われたらどんな暮らし方をしたいか」発表。
4. 昼ご飯は、薪割りをしてから餅つき。
5. 死生観ワークショップ。付箋に「大事な人」5人、「大事な活動・仕事」5つ、「大事なもの、ペット」5つ、「夢・将来の予定」5つを書き出す。自分が胃がんになって死期が迫ってくるというストーリーの過程で、大事な20のものを少しずつ捨てていく。いよいよ死ぬ時には最後に残った1つの大切なものを捨てる。
6. 最後に感想を言い合う。「結婚したいと思っていたけど、そうじゃなくて今の暮らしを変えたかったんだと気付いた」「自分のことを好きじゃないことに気付いた。自分のことを好きになってから出直します」「母との確執があったが、愛の感じ方が違ったんだと気付いた」などの感想もある。

※アフターフォローもある。別々のちんちゃんコンに参加した人たちでも、合うなと思ったら、個別につなげることもある。



取材風景



これまで子どもたちにできるだけ安全で手作りのものを品数多く食べさせたいとやってきたことがベースになっている



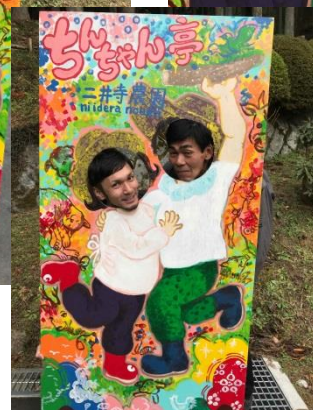
この日の夕食は、北海道のエゾシカを取り寄せ、すき焼き。「わざわざ育てたものでなく、増えすぎたものを食べればいい」



2階の本棚には、脱原発、自然に寄り添う暮らし、地域通貨、農業、自然、子育て、男と女の本等々、ラインナップが面白い。2人のこれまでの人生が垣間見える?!



雨の日でも遊べるようにと設置したヒノキの上れる木。プレーパークの経験が顔をのぞかせる



敷島自治区

調査団体名 : 敷島自治区
設立年 : 2007(平成17)年

団体代表者名 : 後藤哲義(現自治区長)
対応してくれた人の名前 : 鈴木正晴
2013年～16年敷島自治区長 現在「顧問」

活動拠点 : 豊田市杉本町にある通称「敷島会館」
取材日 : 2017年11月8日

調査員 : 山本薫久
レポート作成者 : 山本薫久

活動内容

2007年に旭町は豊田市と合併し、旭地区の自治組織のひとつとして千人余りの敷島自治区(当時の敷島小学校区範囲)が誕生した。合併した旧町村は合併を機にどこも地域を自治的に運営しようというのが課題であったが、なかでもこの敷島自治区の取り組みは大きな成果を生み、先進自治区として評価されている。流出人口が多い農山村部へのUターン者対策として、合併後の豊田市は2010年に「空き家情報バンク」を開設した。登録される空き家が10件程度なのに県内外200世帯400人以上の待機者リストができてしまう状態のなか、敷島自治区を先頭に旭地区で57世帯139人(2018年2月末現在)の移住を実現している。農山村に暮らそうとする若者をはじめとする移住希望者を受け入れようとする住民側の取り組みの成果が結果としてあらわれたものである。この状況を生み出した敷島自治区の役割は大きい。積極的にUターン者を受け入れようとする姿勢もそのひとつでこの姿勢が旭地域に波及したと自負している。

2010年には敷島自治区では「ときめきプラン」という過疎化、高齢化による地域の活力低下に対する「総合的な計画」自治区の進むべきみちしるべができ、課題解決型の自治活動が開始されていた。「ときめきプラン」で2010年にたてた目標値の5年後の目標値⇒到達点を挙げてみよう。自治区人口1050人⇒1063人、体験交流人口500人/年⇒3500人/年、特産物出荷者100戸⇒37戸、合併浄化槽38%⇒38%、つどいの家(地域の居場所づくり)3戸⇒8戸、防犯灯設置数135基⇒120基。人口減少にブレーキがかかるなど重要な前進が示されるとともに、住民にとって重要な課題を総合的に評価し今後の課題に真摯に向き合おうという姿勢がある。

2014年には「しきしま ときめきプラン2015」を鈴木正晴自治区長、鈴木辰吉プラン策定委員長のもと自治区の先輩、若者、女性など20名でプラン策定委員会を構成し検討。策定にあたり行った「私と家族の将来像」の全戸アンケート調査では「10年後、半数の町内会が限界集落、5戸に1戸が空き家という消滅に向かう容赦のない地域の姿を浮き彫りに」した。そのことを住民に伝えプランの検討と住民の主体的な参画を促すため敷島自治区内の老若男女、Uターン者、子育て世代、若い農家、中学生が公開討論会に参加。またプランへの意見を寄せてもらい、2015年3月に自治区総会で全会一致で採択。以後、この計画に基づき自治区運営を推進させている。今回の最大の特徴は、地域課題と実践する部局を一致させたことである。プランには7つの分野があるが、分野に対応した「部」を編成したこと。さらに企画部をもうけ、7つの分野の進捗状況をみて励ましアドバイスするしくみを創設したこと。分野別計画を下に簡略して列挙したい。

- 1、定住促進 都市住民との交流を通して敷島ファンを増やし、地域活動への参加や農産物の直接販売につなげるほか、空き家や有休農地の活用による定住へと結びつけ、地域活力の維持、過疎の抑止を図る。
- 2、産業振興 特産化によるブランド価値を高めつつ、生産物、収穫物が現金収入の拡大・消費につながる流通を推進する。段階的な6次産業化を目指し、拠点施設(加工場、農家レストラン等)の設備・展開を推進する。新規担い手と共同して耕作放棄地の解消を進める。木材・森林の利活用を高め、林産業の振興を図る。
- 3、環境保全 豊かな自然環境や美しい景観は地域の自慢であり、人に安らぎと癒しをもたらす、かけがえのない財産である。この財産を守るための共同管理体制の構築を目指すと共に、都市部企業など担い手を地域外にも広く求めながら、適性な維持・保全を図る。
- 4、高齢者福祉 高齢社会の進展を踏まえ、高齢者が住み慣れた地域で生き生きとくらすよう向こう三軒両隣、世代を超えて支え合う地域社会づくりをめざす。また、高齢者が生涯現役で地域社会の担い手として活躍できるよう健康づくりに向けた取り組みを推進する。

- 5、文化・スポーツ ふるさとの誇りであり、心のよりどころとなる棒の手、打ち囃子などの伝統文化、有形文化財を後世に継承する。また、より多くの住民がスポーツや文化芸能に親しみ、健康増進や交流が図れる環境づくりを進める。
- 6、次世代育成 地域の宝である子どもたちを、地域が一丸となり守り育てる。このため、子どもたちが自然の中で伸びのびと遊べる「つどいの場」を整備し、高齢者を含め世代を越えた見守りの仕組みをつくる。また、若者の地域への定着を、地元企業の職場体験を通して推進する。
- 7、安全安心 安全安心な暮らしの実現において、行政がカバーできる領域には限界がある。真の「安全安心」は住民自らの手で創出しなければならない。住民自らが「できること」をしっかりと見極めて、確実に実践することでその実現を図る。

キャッチフレーズ：

「しきしま暮らしの作法」を守り

基本方針1 過疎化ストップにチャレンジする

基本方針2 しきしまの宝を守る

基本方針3 安心して暮らせる基盤をつくる

会のモットー（何を大切にしているか）：

しきしま 暮らしの作法（別途掲載）

連携している団体・専門家・自治体など：

名古屋大学、東京大学、学泉大学、おいでんさんそんセンター、豊田市、豊田市旭支所、豊田市森林課、なりわい塾トヨタ紡織、住友ゴム、M-easy など

現在直面している課題：

個人的に思うこととアンケート調査などから浮かび上がっている「しきしまの困りごと」（課題）のなかで特に気がかりなもの

- ・若い人は仕事・子育て・お役・消防団・子どもや家族の送り迎えなどに忙殺され、自治活動に参画する機会ががなかなかない。
- ・担い手が高齢化しているが、若者への引継ぎが十分でない。
- ・一人暮らし老人の増加や認知症対策。
- ・買い物・交通の弱者対策
- ・災害対策

今後やってみたいこと：

「ときめきプラン」の実行。地道、確実に実施していくことだと思う。

杉本子ども園(敷島自治区内)が今年1学級増。年少学級が2つになった。移住定住対策が実を結んできていると実感する。この2年間ですでに10数軒の移住が実現した。Iターン、Uターン、Jターンのすべてのケースがある。

森づくりも敷島自治区内9分の9で森づくり会議(豊田市森林課が進める地域ごとの山主さんの集まり)が立ち上がり、森づくり団地化も進み森林での施業も開始されているところである。

空き農地の増加もみられない。農産物の流通ルートも拡大している。農協、やまのぶ(正晴会)、メル友会、いのはな農園、てくてく農園など。

若いお母さんたちでつくるクッキーなどの製造販売(杉ん工房)や農家民宿のちんちゃん亭など手作りの地域産業も活性化している。

たいへん励まされうれしく思っている。

写真



敷島自治区メンバー



討論風景

しきしま暮らしの作法

私たちは、しきしまを豊かな暮らしの場として

未来につなぐことを決意し、

しきしまを愛する全ての人々を温かく迎え入れます。

ここに暮らしの作法十か条を定め、これを守ります。

第一条 家、田畑、山林は地域共有の風景と考えよう。

第二条 家の周りをきれいにし暮らそう。

第三条 空き家を放置するのはやめよう。

第四条 田畑や山林を荒らさず、生業の種を育てよう。

第五条 高齢者が生涯現役で暮らせるよう支えあおう。

第六条 子どもは地域の宝、よその子も大切に育てよう。

第七条 歴史や伝統文化を地域の誇りとして守ろう。

第八条 あいさつを励行し、安全安心な地域をつくらう。

第九条 自分でできないことは、みんなで助け合おう。

第十条 地域の未来のために何ができるか考え行動しよう。

平成二十七年三月 敷島自治区

合同会社 木かんしゃ

調査団体名 : 合同会社 木かんしゃ
設立年 : 2015年
団体URL : <http://ki-kansha.jp>
活動拠点 : 豊田市太田町蟹田6番地
取材日 : 2017年12月19日(つくラッセルにて)

団体代表者名 : 庄司知生
対応してくれた人の名前 : 庄司知生
調査員 : 浜口美穂 曾我部行子
レポート作成者 : 曾我部行子

活動内容 “松園式燃焼ユニット”の薪ストーブの普及に始まり、地元材を豊富に使った“環木の家”の普及に取り組み始めている。山の資源を最大限に活かす暮らしと、そのための新しい道を模索し続けている。

木・森・すべて全てに感謝しながら仕事をしていきたいと名付けた「木かんしゃ」。社名に引かれて、木への思い入れが深まっていった。足助の築100年の空き家に家族で移住。8つの特長(次頁)を持つ松園式燃焼ユニットという画期的な薪ストーブに出会うことで、住と職とが結びついた。地元にある資源(山の木)を活用する仕事はさらに、地産材を通常の2.5倍使う高機能で手頃な価格のセミオーダー住宅“環木の家”普及へと向かっている。

キャッチフレーズ 地産材を多用し、山村で交流の場を生み、定住を助けない

松園式燃焼ユニットに出会って、常識を覆す薪ストーブから、高性能、高機能な木の家を広める事業へ。

会のモットー(何を大切にしているか)

もっと地元の木を使って、もっと田舎に住んでほしい！

設立から現在に至るまで変化したこと

2011年足助に移住する前は、名古屋でNPOに勤務していた。妻が妊娠したことで、子どもを育てるには、都市でいいのかという疑問が湧いた。三重・岐阜で移住先を探したが見つからず、地域の人と付き合いこうという思いで豊森なりわい塾と千年持続学校にエントリーした次の日に3.11が起こった。名古屋から通勤しやすい小原地区で空き家を探したが見つからず、妻も働けなくなって、生活が苦しくなったそのとき、足助の奥の集落で今の場所が見つかった。最初は足助から片道3時間かけて通勤していたが、だんだん名古屋に行くことが居心地悪くなっていった。名古屋のNPOの仕事を受託して家で行いつつ、豊根村の移住定住のための計画づくりのお仕事も頂くこととなり、2015年4月に合同会社を立ち上げた。そこから松園式燃焼ユニットと出会って、さらに環木の家へと繋がっている。

連携している団体・専門家・自治体など

- 松園式燃焼式ユニットを開発した松園和正さん、顧問の丹羽健司さん、ユニット製作の原田昭二さん
- 地産材を2.5倍使う“環木の家”を設計する網野禎昭(法政大学)さん その他連携する個人、団体多数

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動

- 松園式燃焼ユニットの製作は、地元小渡町の原田鉄工所に依頼(地元の企業と連携)
- 地域の活動場所となる旧築羽小学校に薪ストーブを設置し、その場所は「つくラッセル」として今後さまざまな地域発想の集いの展開が予定されている。次回は「つくラッセル」を取材する必要がある。

現在直面している課題

環木の家は、昨年11月に国交省の「サステナブル建築物等先導事業」補助金申請を行ったが採択されず。他の補助金等に再度エントリーする予定。
今後、展開していく中で、住宅メーカーのように保険や保障のこともやらなくてはならない。ある程度、この取り組みを理解してくれる人にしっかり説明していくことが必要になってくる。

今後やってみたいこと

- 土地の仲介から建築、そしてアフターメンテナンスまでのトータルコーディネート。
- 木の駅プロジェクトや森林ボランティア、自伐型林業が誰でも無理なくスタートでき、続けて行けるようになるための仕組みづくりや商品開発。

チームオリジナルの質問

<質問内容> “松園式燃焼ユニット”について教えてください。

<答え>

8つの特長

- ① 天井や屋根への穴あけ不要(窓ぬき・壁ぬき)
- ② 設置場所から壁まで距離が長くてもOK
- ③ ストープの移動もできる
- ④ 室内放熱が大きく極暖！(薪の量が抑えられる)
- ⑤ 煙突無いが低温になる(煙突火災のリスクが減る)
- ⑥ 煙突掃除がしやすい
- ⑦ 市販の薪ストーブに取り付けられる
- ⑧ ファンで強制排気(着火しやすい)

<質問内容> “環木の家”とは、どんな住居ですか？

※ 標準価格 一式コミコミ40万～60万円ほど。

<答え>

高性能で高機能なセミオーダー型の小さなお家

- ・ 耐震性が高い(柱・梁+面でも耐える)
- ・ 長寿命(目で見れて修理できる設計)
- ・ 採光・日射遮断効果、通気性が高い(窓位置)
- ・ 断熱・蓄熱・防湿性が高い(厚壁・二重窓・ベタ基礎)
- ・ 太陽熱の給湯、薪ストーブの暖房
- ・ 家族・仲間との楽しい時間と新しい発想を生む交流の場
- ・ 自由な間取り変更(暮らしの変化に対応)
- ・ 木の壁の厚さは12cmで、何も塗らなくても腐食しにくい。

その他、伝えたいこと

国土の67%が森林の日本は、もっと木が使われるようになっていいはず。
山村・森林には値段以上の価値がある。
暮らすことにも値段以上の価値がある。

だから、もっと木を使って、
もっと田舎に住んでほしい。

日本の森は今が切りどき！

松園式燃焼ユニット
シングルタイプ



ダブルタイプ





松園式燃焼
ユニット(ダブル
タイプ):つく
ラッセル



ススは引き出
しの中に溜ま
り掃除がラク



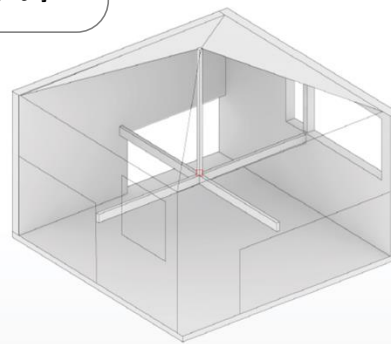
説明する
庄司さん



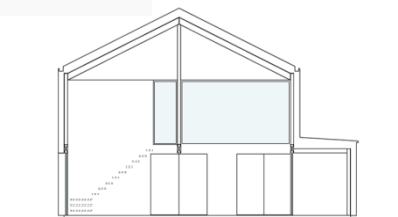
燃焼ユニット
の外煙突から
の煙



松園式燃焼
ユニット(シン
グルタイプ):
農家民宿ち
んちゃん亭



← 環木の家



小渡セイゴ水辺愛護会

調査団体名 : 小渡セイゴ水辺愛護会
設立年 : 2008年
団体URL : なし
活動拠点 : 小渡地区の矢作川(左岸)
取材日 : 2017年12月13日(水)

団体代表者名 : 鵜居利行
対応してくれた人の名前 : 鵜居利行
調査員 : 浅田益章、吉橋久美子
レポート作成者 : 吉橋久美子

活動内容

市内に19ある「水辺愛護会」の一つとして、2008年から活動を開始。矢作川上流部の小渡町内(“セイゴ”は地名)で竹が繁茂した河畔林や、竹で見通しが遮られていた県道沿いを明るくするため、竹の間伐・枯れた竹の運びだし等を行っている。
約50名ほどが会員登録しており、作業日には10数人～20人程度が参加して、暑い夏も寒い冬も、大変だが毎月活動している。伐った竹はまちのお祭りや行事などで活用している。「小渡やな」の竹も活動地から持って行ってもらっている。

キャッチフレーズ

県道沿いの景観をきれいにし、竹林がヤブ化しないように整備を地道にコツコツ行う。

会のモットー(何を大切にしているか)

- ・地域がヤブ化してしまわないよう、整備をする。
- ・県道沿いを明るくしたい。
- ・会員同士の親睦、コミュニケーション。
- ・竹の活用。
- ・身体を動かして健康に。

設立から現在に至るまで変化したこと

最初の2～3年は竹を伐ることに集中したが、竹を伐るばかりではね、と、子どもたちと交流を始めた。竹を飯盒にしてご飯を炊いたり竹細工を教えたりしてきた。しかし子どもも忙しく、その後続いているわけではない。地元の行事で竹を活用してもらうようにしている(竹灯籠、竹のたいまつ)。地元のイベントや市からの要望で竹を提供することもある。また、ここ数年は竹皮ひろいもやっている。
これらの活動の結果、竹が生い茂り、倒れ、真っ暗だった河畔林が、明るい広場や明るい林となった。県道からの眺めを遮っていた竹も伐ったので、対岸への見通しがきくようになり、ドライバーからも明るくなったと感謝されている。路面にも日が差すようになり、冬の凍結した路面が溶けるのが早くなったようだ。

連携している団体・専門家・自治体など

愛知工業大学、愛知学泉大学、豊田市。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ・若い人たちが主催する行事にも竹を提供している。その時に一緒に作業をしてもらう。
- ・活動地を利用しやすいように整備しておく。
- ・次の世代にも愛されるように、川沿いにハナモモやヒガンザクラなどを植樹している。
- ・近隣の団体との交流。横の交流をすることでいいところは取り入れ、学びあう。

現在直面している課題

- ・会員の高齢化。
- ・一回切っても竹はまた繁茂してしまう。整備した後草刈りの面積が広がって大変である。
- ・年間通して、色々な行事が多く負担が大変（伐採活動は重労働である）。

今後やってみたいこと

- ・外部の人と交流を深めたい。都会からくる人が増えてほしい。
- ・企業ボランティアと一緒に活動を推進したい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・小渡は観光のまちづくりを進める方向だろう。商店街にがんばってもらって活性化してほしい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

小渡はどんなまちですか？

<答え>

矢作川で材木や竹を筏にして流していたころ、隣接する時瀬町が山から筏を出す基地となっており、小渡の町は「遊ぶところ」として大変な賑わいだった。映画館もパチンコ屋もなにもかもが揃っていて「“小渡”か“江戸”か」というくらいだった。

しかし筏流しがなくなり、勤め人が増え、子ども世代はまちへ。今は人口が減ってしまっている。

それでも水辺愛護活動の他にも、小渡城跡を巡る歩道の整備、県道の整備、そしてさまざまな行事など、まちをよくするためにみんなで頑張っている。

その他、伝えたいこと

- ・川は宝物だと思っている。ダムができて水量が減り、川底が掘られてしまっているが...
- ・小渡セイゴ水辺愛護会の会員の多くは、上記のように他の活動も行っているので大変だが、無理をせず、コツコツとやっていきたい。
- ・15年前に夢かけ風鈴まつりを立ち上げ、少しでも多くの人に小渡に来ていただくまちづくりをしている。若い人たちと今後も力をあわせて進める。
- ・少し下流の河川敷に沈下橋でもよいので橋ができるとよい。

写真

取材風景
(鵜居さん:左)



活動風景(2016年12月撮影)



足助きこり塾

調査団体名 : 足助きこり塾
 設立年 : 2001年12月
 団体URL : <http://asukekikori.com/index.html>
 活動拠点 : 豊田市足助町「森トピア」
 取材日 : 2018年2月10日

団体代表者名 : 代表 丹羽健司（通称ニワケン）
 対応してくれた人の名前 : ニワケンさんと仲間5人
 調査員 : 大重隆太郎
 レポート作成者 : 大重隆太郎

活動内容

足助きこり塾は、01年12月に発足。足助の篤林家スーさんの広大な森で、「都会の風を森へ、森の風を都会へ」と想うスーさんと、山仕事や山里暮らしの知恵や技術を学び「自分の暮らしは自分でつくりたい」と願う都市住民との交流が始まった。メンバーは30代から70代までの男女約20名。名古屋市を中心に遠くは丹波市、四日市市から通う。活動日は毎月第2土曜日と第4日曜日で、他にイベントを開催することもある。足助香嵐溪から10kmほど入った50分～名古屋ドーム10個分～のフィールドは「森トピア」と名付けたスーさんが丹精込めた森、そこには、幼稚園、小中高生から大学生、そしてオジサマ、外国人までたくさんの方が訪れる。最近では女性きこりをめざす「森女」も増え、その支援も行っている。子どもも大人も、森を調べることから、手ノコやチェーンソーで間伐体験したり、その木を学舎の製材機で挽いて、工房で机をつくったり木工したり、薪割したりピザを焼いたり、ターザンロープで「アーアー」したり、ハイジのブランコに乗ったり・・・森を愉しみ森に学べる。その一角に4ヘクタールの「アマチュアの森」があり、そこでスーさんから基本に忠実で安全な伐倒や丁寧な造材から機械による集材までを学んできた。そのままプロになって活躍している仲間も。09年には地域の人も街の人も学べる「生闘学舎」が東三河高等技術専門校の協力で建った。スーさんが設計し、生徒さんたちが墨付けから刻み建て前まで実習し、メンバーが伐り出し、皮むき、基礎コン打ちから土壁塗りまで素人でもやれることは全部やった。さらに2017年には本格ピザ窯も完成し、森の愉しみが一つ増えた。「森トピア」の入り口には生闘学舎があり、手入れされたスギ・ヒノキ林の間に山桜やコナラに囲まれた池が点在する雑木林ゾーンとサワギキョウの湿原がひろがる。

キャッチフレーズ

「都会の風を山へ、山の風を都会へ」 そのために、まずは自分たちが実践し、楽しむこと！！

会のモットー(何を大切にしているか)

「次の種を蒔く人になろう」～塾の規約に明記「じっくりと精神と技術を学んだら、卒塾して次の種を蒔く人になろう」
 「まっ、いいか」～ややこしい時はこの決め台詞！

設立から現在に至るまで変化したこと

発足の時、オギャーと生まれた「安井森人」君がもう高校生になった。暗かった森に、小屋が3棟、こどもたちがつくった「9歳の家づくり」の家が5棟、ピザ窯2個め、そして生闘学舎1棟が建ち、ターザンロープと、ハイジのブランコ2本ができた。初夏、一本もなかったササユリが2年目に一本咲いた、それが5年目に30本に、そして数え切れなくなった。池の上に1個みつけたモリアオガエルの卵胞が5年目に30、そして数え切れなくなった。3年目から毎年7月と10月に間伐と森遊び体験に来るようになった「のびっこ安城」の小学生の参加者数が約900人に。スーさんに習ってチェーンソーを使うのが精いっぱいだったメンバーがプロになったり、あちこち森づくり支援に行くようになった。
 (故)ゴンさんの入塾と製材機の導入、生闘学舎の建設で、活動が「森づくり」から「木づかい」に大きくシフトした。

連携している団体・専門家・自治体など

矢作川水系森林ボランティア協議会(矢森協)、NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター、あすけ里山ユースホステル、おいでんさんそんセンターなど

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、地域資源の活用など)

○森づくりから木づかいまで

1か所のフィールドで雑木林や湿原の自然観察から人工林でのチェーンソーによる伐木から造材、機械による搬出、製材から木工まで一貫して体験・学習できるフィールドと施設、ノウハウを揃えているところは皆無に近い。その特長を最大限生かしたワークショップを開催してきた。流域の交流と学習の場になりつつある。

現在直面している課題

いつまでたっても安全第一、慣れが一番怖い。「10年経っても10年目の初心者」の言葉を肝に銘じて永年無事故を目指す。

どんな情報・人脈が必要か

最近、木工を通して福祉施設や木工マニアとつながりができた。SNSや「おいでんさんそんセンター」や「耕ライフ」誌などとつながりながらこれまで付き合いの薄かった層ともっとつながりたい。

今後やってみたいこと

若者も、子どもも、女子も、オジイも、誰でも自分の暮らしの少しでも自分でつくれるようにしたい。山菜が採れる、木も伐れる、製材もできる、ピザも焼ける、テーブルも作れる。そんな学びと実践の場にしたい。

【今後の具体的な活動内容】

・「ゴンさん工房」で、伐採、搬出から製材、家具づくりまでの一貫作業が学べる、こだわりのワークショップの開催を目指しています。

チームオリジナルの質問

<質問内容> スーさんの山づくりとは？

<答え> 先祖から引き継いだ人工林を一人でコツコツと、幅員1.6mの作業道を開設しながら搬出間伐を繰り返し、林床の明るい下層植生が豊かな森林になりました。特に団地内に点在する湿原では強度に伐採し、光を入れビオトープ化し、ここを訪れる子供たちの自然学習の場を提供してくださっています。また、近年は雑木林を手入れをしながら薪生産にも取り組んでいます。

チームオリジナルの質問

<質問内容> メンバーは遠方からの通いなんですか？

<答え> 本日の参加者6名の中では、ニワケンさん、ヤスさんが遠く、名古屋市内から60キロ以上を通っています。月2回の定例会は第2土曜日と第4日曜日、「こんな積雪の中、6人も集まるなんてやっぱりヘン！(笑)」と丹羽さん。

写 真



取材当日の拠点「生闘学舎」



薪ストーブを囲んでのミーティング(学舎内)



学舎内のゴンさん工房(一輪車の向こうにシートを被ったプレーナー、左奥には集塵機)



のびっこ安城の間伐体験



「森っ子、森女、森寿養成講座」イベント集合写真

株式会社 山恵（やまけい）

調査団体名 : 株式会社 山恵
 設立年 : 2013年11月
 団体URL : <http://inosisi-yamakei.com/>
 活動拠点 : 豊田市新盛町菅田20-1
 取材日 : 2018年1月22日

団体代表者名 : 代表取締役 小澤庄一
 対応してくれた人の名前 : 店長 鈴木良秋
 調査員 : 松井賢子、浅田益章
 レポート作成者 : 浅田益章

活動内容

（設立の目的）

豊田市内の農業者、林業者（狩猟者）等が中心となり、獣害対策や狩猟で駆除された獣肉（猪、鹿）の有効活用のために設立。新たな産業振興を図る。（6次産業化ネットワーク活動）

（事業内容）

獣肉加工処理施設及び直売施設を設置し、豊田市内で捕獲される獣肉を解体、精肉加工・販売する。獣肉を活用した加工品（肉まん、ソーセージ）の開発・販売。

キャッチフレーズ

山の恵みを活かす会社。

会のモットー（何を大切にしているか）

いいものを安全に。おいしいものを提供したい。

設立から現在に至るまで変化したこと

- ①5年前に創業。素人で出発した。ゼロからの試行錯誤で進化してきた。お店ができたのが2年前。その前から獣害対策を考えていた。「ジビエの施設」が地元にできれば獣害対策をする猟師も解体処理の面で助かるし、食材としても活用できる。
- ②現在では年間600頭ほどを食肉用に買い上げて処理している。豊田市では10年ほど前は捕殺した2～3千頭の大半を穴に埋めていた。

連携している団体・専門家・自治体など

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| ①食肉の販売（小売業（株）ヤオミ） | ⑤情報提供・利活用支援（豊田市） |
| ②商品開発・食肉販売（小売業（有）近藤商店） | ⑥原料調達（猟友会の会員） |
| ③商品開発・販路開拓（NPOボランティアネイバーズ） | ⑦精肉販売（豊田市旅館・飲食組合） |
| ④販路開拓（足助商工会） | ⑧加工品の受託製造（山遊里） |

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、地域資源の活用など）

- ①農業者や林業者（狩猟者）から獣肉の買取を行うことで捕獲意欲が高まり、獣害駆除が積極的に実施され地域の農産物の獣害が減少することが期待できる。
- ②埋立や焼却処分をされていた獣肉を食用に加工することで獣肉の流通が改善され、獣肉を活用する飲食店や小売業者を中心に売り上げの増加が期待できる。
- ③獣肉加工処理施設及び直売施設の設置により獣肉及び加工品を販売することで、事業実施主体の所得向上と雇用の増加など地域社会に貢献できる。

現在直面している課題

- ①狩猟の頭数の変化が大きいので年間の雇用が安定しない。
6～8月の夏場は少なく、売り上げの波がある。専任が1名。残りはパートで対応している。
- ②猪は一頭一頭の生活環境、食べ物が違うので肉質が安定しない。また、年齢は1～2歳が多く、19～35kgと小さい。衛生管理台帳でデータを記録している。

今後やってみたいこと

- ①猪の丸ごと活用（皮はクラフト利用、骨はスープのだし汁、牙は工芸品）
- ②猪の住む山里保全調査（愛知教育大学との連携）
- ③猪肉を使った料理教室の開催
- ④猪鍋やBBQが気楽にできる公共の場づくり

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

現在は関係先の食肉の販売から、商品開発、販路開拓、豊田市からの情報支援、猟友会の協力、精肉販売の旅館、飲食組合などのつながりができている。今のところは十分な情報があるのでいい。
これから新しい事業が増えたらそのための情報が必要になるだろう。
直面している課題や今後やってみたいことに必要な情報を得たい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

今回の訪問取材にあたっては社長であり創業者の小澤庄一さんに先ず電話でお願いしました。元足助観光協会会長であり、観光庁の「生活文化体験型観光（山里版）のカリスマ」という称号を持つ方です。有名な方でありご高齢であり、初めての飛び込みのお願いで心配でした。「店長の鈴木良秋さんが一番いい」と即座に快諾、紹介していただきました。感謝の気持ちとともに、こころの広さを感じました。何か、足助町やこの地の新盛町には外からの人を受け入れる心の広さを感じる共通のものがあります。

<答え>

取材時に店長の鈴木さんにお聞きしたところ、山恵創立から一緒にやってきた。今は現場第一線を任されているとのこと。信頼は絶大。山恵のことをしっかりと考えてやる気いっぱいでした。

小澤さんは「三州足助屋敷の建設」などで地元での功績を積み重ねてきました。独創的なアイデアとそれを実現する行動力や市場原理を考慮した「独立採算」の緻密な計算のもとで人材の登用や育成のうまさがあったことを見逃せない。まちの将来を担う後進に委ねている。山恵の鈴木さんはまさにその通りであった。まさに流域圏の担い手である。

その他、伝えたいこと

（こだわり）

「肉の鮮度と衛生の確保」

漁師から連絡を受けると、殺処分から1時間程度の間に血抜きや内臓処理をすることを徹底。野生動物ならではの臭みが出るから。
ジビエならではの良さを引き出したいから。

「山の幸を消費者にどう提供するか」

冬場のシシ鍋だけでなく、夏場など季節を問わずに美味しくジビエを食べていただきたい。ソーセージやハム、ギョーザといった加工品に力を入れて販売したい。肉質がよいとの評判から地元だけでなく通信販売や関東の飲食店とも取引が広がっている。

「生産するジビエの量は猟師の捕獲数次第」

とれる年もとれない年もある。季節によって大きく変動します。自然頼みである。値段は解体してから決めているという。一頭いっとう住む環境によって肉質が違うのがジビエである。それを活かしたい。山里の地域の多くの人のつながりと協力支援があってこそできる。

写真

取材風景

(山恵 店長の鈴木良秋さん:中央)



① 志を持った元気なオヤジさん。長年この地に暮らし
三河の山里を愛する。心を込めて食肉加工しています。

活動状況(2018年1月22日撮影)



⑦イノシシをいただきます。自然への感謝と共にその命を無駄なく利用すること



山の恵みを
みなさまに。
いただきます。



② 家庭の食卓へ。地元産の味噌を使っている。
本格的なシシ鍋が味わえます



⑥ ヘルシーで良質のお肉。無駄なく、美味しく加工する。工場の衛生面は万全です



③ 業務用ジビエ素材。
ジビエグルメ街道スタンプラリー（参加店舗17）



⑤ 猪を持ち込む猟師のみなさん。
獣害駆除で捕獲されるイノシシを受け入れる。
農家の多くは獣害に困り果てています



いい流れに。
循環の輪と和。
三河の山里が
元気になる。



④ 後日、山恵さんの近くにある豊田市里山くらし体験館「すげの里」に。山恵さんの食材でおいしい猪鍋。話が弾みました。(2/23)

めえープルファーム

調査団体名	めえープルファーム	団体代表者名	鈴木光明
設立年	2015(平成27)年12月24日	対応してくれた人の名前	鈴木光明 代表、鈴木康生 前事務局長
団体URL	(フェイスブック めえープルファーム で検索)		(同席 貞島容子 矢作新報記者)
活動拠点	豊田市新盛町菅田20-2	調査員	野田賢司、水谷裕子(同席 夫の澤さん)
取材日	2017年12月17日	レポート作成者	野田賢司

活動内容

(1) 活動目的

本団体の活動は、少子高齢化が進む山里で、耕作できなくなった農地等の除草にヤギを放牧し、その維持管理を容易にして休耕農地・原野を再生し、山里の営みに役立たせる。同時に地域の子供たちに生き物(家畜)とのふれ合いの場を提供する。もって、山里の農地・集落の景観を守り、活力が持続する故郷を次世代に引継ぐことを目的としている。

(2) 設立経緯

足助地区も山里の営みが減少する中で、人工林の手入れ不足とともに放置され荒れる農地等も多くなり、かつて美しかった故郷の姿が変貌し、農地等の保全管理も地域の大きな課題になってきた。この解決手段にと、足助地区北部に位置する新盛町の住民ら有志が集まって「ヤギ(山羊)プロジェクト」を立ち上げた。きっかけは、新盛自治会長の鈴木光明氏が地元女性から「自分たちの手で新盛を盛り上げたい」と相談を受けたことや、知り合いから「長野県の売木村では耕作放棄地の草刈りにヤギを使っているぞ」と聞いたことであった。

2015(平成27)年、新盛町等の住民らが長野県南信州の売木村を視察した。そこで、ヤギが耕作放棄地の草を食べて美しい風景が保たれているのを目の当たりにした。また、村の活性化に尽力する清水秀樹村長の話聞き、斬新的なアイデアや取り組みに大きく心を動かされた。視察を終えたメンバーは、早速、取り組みをスタートさせた。会長は新盛自治会長の鈴木光明氏、事務局長は同町の喫茶「郷地」店主の鈴木康生氏が務める。本会当初メンバーは、(株)山恵の代表取締役(元足助町助役)の小澤庄一氏、新盛里山耕実行委員会長の鈴木 智 氏、足助支所職員など10人であった。

同年12月8日に、里山くらし体験館「すげの里」で第2回ヤギ会議が行われた。協議事項はプロジェクトの趣旨説明、ヤギの飼育場所、運営資金の調達方法、都市住民との交流などだった。メンバーは皆それぞれに仕事を持っているため、飼育を当番制にしようという案が出たが、飼育者とのスキンシップを好むヤギの習性から無理ではないかとの結論に。飼育場所が喫茶「郷地」の近くに決まったため、鈴木康生氏が主に世話することになった。ここを拠点にヤギを農地等へ連れて行き草を食べさせる計画である。

(3) 主な活動経過

2015(平成27)年度	本会設立。名称は、ヒツジのお馴染みの鳴き声に、足助地区の名所「香嵐溪」もみじ(紅葉)のカエデ類の英語の総称 Maple(メープル)と、農場・牧場 Farm(ファーム)を合わせ、地域性・固有の取り組みを表現(パフォーマンス)している。ヤギ飼育研修。飼育拠点整備開始。
2016(平成28)年度	飼育拠点の整備、飼育小屋の設置、ヤギ(2頭)購入、飼育拠点の開園式(10月)
2017(平成29)年度	ヤギ貸出し放牧の試行開始。※2018(平成30)年度に本格化させる予定。

キャッチフレーズ

ヤギで除草のお手伝い

会のモットー(何を大切にしているか)

ヤギで山里の美しい風景を守る。ヤギで草刈り、山里・集落を美しく。息子たちが自慢できる故郷にする。

設立から現在に至るまで変化したこと

- ・ヤギの飼育拠点の確保。飼育施設の整備、飼育・飼料小屋の建設。現在は、飼育施設の一部移動を予定している。
- ・ヤギの購入。当初は2頭で始め、3年目の今は6頭に増えている。
- ・活動本格化。ヤギの飼育研修を経て、除草放牧、貸出しの試行に移った。
- ・会員の増加。初年度:10人。2年目:19人。3年目(4月現在):26人。
- ・事務局長の交代。当初:鈴木康生氏(現 飼育員)がヤギ飼育と兼務。現在:竹尾博史氏(三州しし森社中)が担う。

連携している団体・専門家・自治体など

- ・豊田市、豊田市足助支所（足助地区わくわく事業補助金）
- ・トヨタ労組 社会政策事業 里山耕（農業体験活動）

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、地域資源の活用など）

- ・耕作放棄農地の除草に留まらない、多角的な事業展開を構想している。
樹園地化して雑草の除草をやぎに担ってもらう。果樹の収穫・販売。
やぎの乳製品づくり。（生産・販売にはまだハードルが高い。）
やぎの他に、養鶏なども行い、食肉・採卵・その他の産直販売、動物とふれ合いを楽しむ場所・イベントづくり。

現在直面している課題

- ・日々やぎの世話ができる人の確保。
- ・やぎの飼育に係る経費：飼料（特に、冬季の期間）、予防接種など。当面は、鶏肉・卵生産販売なども行う必要がある。
- ・飼育エリア・施設の一部（子供達の遊び場）の移設。（国道153号寄りの平地に移す。）

今後やってみたいこと

- ・実績づくり（除草放牧、地元住民等への貸し出し）への追及。次年度から、今飼っているやぎ達を“草刈り隊”として、要望がある放置農地の維持管理に派遣したい。一件でも連れて行って放して実績を上げたい。
- ・将来：やぎの乳から加工食品をつくり販売できるようにする。除草で美しくなった土地を果樹園にしていく。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・地元の町内だけでなく、この取り組みに広く支援をいただきたい。
- ・耕作放棄農地の除草貸出し希望者の情報提供。矢作川流域圏でやぎ除草の実績PR。
- ・やぎの乳製品づくりなどに係る指導。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

- ・飼育を始めたやぎのプロフィールをお聞かせください。

<答え>

- ・飼育種はザーネン種です。（特徴：体毛がほとんど白色で体が大きい。飼育し易く、病気に罹り難い。）
- ・最初の2頭は、売木村の牧畜者から購入しました。
もみじ♀、かえで♀・・・姉妹、新盛小学校の子供達が命名してくれました。
- ・次の2頭は、どん♂・・・稲武から買ってきました。（引っ越しで農園の草刈りに出来なくなった2頭。）
ぐり♂・・・同上、交雑種です。
- ・更に2頭は、ころろ♀ 雑種・・・巻き毛があり、小さい方です。
山奥で飼っていた老婦人が高齢化し、面倒見られなくなったため引き取った個体です。
ふぁむ♂ 2017（平成29）年5月生れの子やぎで、鈴木康生氏（前事務局長・現飼育員）の所有です。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

- ・放牧場所までのやぎの運搬はどのようにされていますか。

<答え>

- ・軽トラで行っています。荷台を柵で囲み、中に乗せて運びます。乗り慣れていないと難しいかもしれませんが、行く先の場所で草がふんだんに食べられることを学習すると、運搬にうまく慣れてくれます。長距離でも耐えてくれます。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

- ・家畜導入による農地管理の付加価値として、実践活動の効能を分かりやすく伝えると理解が進み協力や支援も広がるのではないかと思います。取材者としてもこの取り組みはとても興味深く、流域圏連携のお手伝いとして、現地を定期的に訪問してデータ収集し、活動の実績と効能について事例調査*してみたいと思いますが、よいでしょうか。
- * 阿摺川流域で活動エリアと対照(未活動)エリアの比較、活動の定量化と報告。

<答え>

- ・可能です。喫茶点「郷地」に参考図書などを置いています。近くには豊田市里山くらし体験館「すげの里」もあります。

その他、伝えたいこと

- ・ヤギは目に見えて草を速く食べていないので、果たしてヤギで除草が可能なのかと疑心暗鬼の村人もいます。ヤギは一日中食べている感じなのですが、春になると農地の草が抑制される状態がわかると思います。
- ・一緒に活動してくれる会員を募集中です。問合せ先：鈴木代表(Tel090-7043-2688)又は喫茶点「郷地」(Tel0565-67-2706)。

写真



写真1 めえーぷルファームの鈴木光明会長



写真2 めえーぷルファーム・ヤギ舎（小屋）



写真3 ヤギ舎内：6頭の様子（入口から）



写真4 同左・冬季屋内で過ごすヤギ達



写真5 飼育場：人工林床・林縁緩斜面



写真6 聞き取りの様子（左奥：鈴木会長）

里楽暮住（りらくす）しもやま会

調査団体名 : 里楽暮住（りらくす）しもやま会
 設立年 : 2013(平成23)年
 団体URL : <https://relax-simoyama.jimdo.com/>
 活動拠点 : 下山支所、下山交流館
 取材日 : 2018(平成30)年2月3日

団体代表者名 : 倉地雅博
 対応してくれた人の名前 : 倉地雅博 会長
 調査員 : 清水雅子、近藤朗
 レポート作成者 : 清水雅子

活動内容

当会は地域への定住促進(Uターン、Iターン)を進める住民組織で、下山地区の各自治区からの代表17名がメンバーとなっている。

これまで、集落カルテの作成、婚活イベント「しもコン」の開催、空き家・空き地の発掘、新成人等に対する定住に関するアンケート調査、移住・子育てガイドブックの発刊など、内外へのアピールや定住促進のために多彩な活動を行ってきている。

また、平成29年度からは、更なる活動の充実と加速のため、人材育成・受け皿・交流の3部会構成で活動している。下山地区では、7つの各自治区で一戸の新規移住者を受け入れる目標を掲げ、実現に向け頑張っている。

活動目標と骨子

活動目標:各自治区、1世帯子育て世代を受け入れる

～スピード感を持って活動は楽しく、やるときは真剣に！ Only～
 ～各自治区長が熱い広告塔になっていただく事

活動骨子:

3グループ並列活動で、グループが主役の活動とする

最重要	受け皿グループ	空き家・空き地のバンク登録促進のための仕組みづくり
	交流グループ	子育て世代の定住促進のため、近隣都市部からの移住希望者向けの広告塔
	人材育成グループ	定住促進のため、地元人がしもやまの魅力を発信アピールできる人づくり

取材者がキャッチフレーズ

人に優しいしもやま人がもてなす「しもやまに住んでみりん！」

会の設立経緯と目標、モットー

平成21年の地域会議において、地域課題の解決として定住促進について検討。翌22年に各集落の代表者が一堂に会したワークショップで『しもやま住んでみりん定住促進計画』を策定。活動母体となる推進組織「里楽暮住しもやま会」が23年6月に発足。

■目標 “里”の恵みと地域の絆に包まれて、自分らしく(“楽”しく)“暮”らし(“住”み)続けられるまち
 (『しもやま住んでみりん定住促進計画』の将来像より)

■モットー 子供たちが、ずっと下山に住み続けたいと思ったり、外に出ても下山の魅力が語れるようになってほしい
 そのためにはまず、大人が、下山を愛し、次世代を見据えた行動をしようではないか

設立から現在に至るまで変化したこと、その結果

はじめは手探りだったが、徐々に活動の幅が広がり、その結果、平成30年1月末時点で11世帯27名が下山地区へ移住した。また28年度のしもコンでは4組のカップル成立、うち1組が入籍した。

ここからが勝負、と、2年ほど前から目的と具体的な行動を明確にし、29年度からは“人材育成”“受け皿”“交流”の3部会構成で活動を並行して進めて行くようにしたところ、更に活動が活発になってきている。



新刊「下山地区 移住・子育てガイドブック」

【人材育成】

新成人へのアンケート調査

実際に地域出身の若者がどう思っているのか、その現実と定住促進への課題をアンケートにより明らかにした。

女性住民の定住勉強会&座談会

パパは外に働きに出て頑張っているが、地域をよく見て理解し守っているのは、地域に根ざして家事や子育てを行っている子育て世代のママ。彼女たちの意見を活動に反映させていこう、と、女性の勉強会&座談会を開催。意見交換は盛り上がり、現実をよく踏まえた真剣で具体的な意見が多く寄せられた。

下山中学校の生徒との意見交換会

下山の子どもたちが地元の魅力をあまり良く知らない、という危機感から、中学校1年生と2年生に下山の現在・未来の姿をキチンと伝えるとともに、意見交換する中で、①下山の魅力に気づいてもらい②下山の未来を託し拓いていく人材育成を実施。生徒が開発した「オリジナル五平餅」など、新3年生となった生徒自身が、「ど～だん!!香恋の里鯉恋まつり」で発信している。

【受け皿づくり】

空き家・空き地の発掘

移住者や定住者を受け入れるための一番大きなハードルは、“衣・食・住”のうちの“住”がないこと。地域内にた～くさん埋もれている空き家・空き地が「貸出物件」もしくは「売出物件」になっていけばそのハードルを越えることができるのだが、これがなかなか進まない。

「空き家・空き地が登録物件となることが、子どもたち・孫たちのためにつながる」という理解を、地域の方々にいかに広めていけるかが、今後の活動の重要な鍵となる。

【交流】

泊まりにおいでん！inしもやま

下山地区で田舎暮らしを体験してもらうことを目的に、お寺で1泊2日の宿泊イベントを開催。100の言葉より1回の体験は、下山の本当の良さ(地域の人とのほんわかしたふれ合い)を実感してもらえるだろう。

婚活イベント「しもコン」

地域の独身男性と地域内外の独身女性とが実際に出会える場づくり。29年2月のしもコンでは、4組のカップル成立、うち1組が入籍するという快挙を達成。残念ながら30年2月のしもコンは参加者不足により中止になってしまった。

現在の最重要課題と今後必要なもの

地域には空き家が沢山あるが、実際に貸し出し可能な物件として空き家バンクに登録されているものはまだ一部である。移住希望者に対して物件が少ない、という最も厳しい現実がある。

そのためには、各自治区の区長さんやサポーターの皆さんが旗振り役になってもらい、空き家を物件にしていくよう地域全体で盛り上がっていく、真剣かつ明るく前向きな元気が必要。



子育て世代の定住勉強会&座談会の様子



泊まりにおいでん！inしもやまの様子

■下山に起きていることは他の地域にも起きること

「子どもたちに下山の魅力を訊ねると、自然が豊かだ、という答えがよく返ってきますが、更に『どんな自然が豊かなの？』と訊ねると、具体的に答えられないんですよね。」という倉地会長の言葉に、正直、私もドキッとしました。

私自身は自分の田舎の良さを、どれだけ具体的に話せるだろうか…生まれ育った地域のことをどれだけの人に分かっているのか…

下山地区の諸課題は、日本の多くの地域に共通するものであり、その課題を自分達の地域らしく乗り越えて行く姿、里楽暮住しもやま会は日本における一つのロールモデルを作って下さるのではないか、という期待に、私の鼻は膨らんでしまいました。

■理論的な会の活動

こういうボランティア的活動は、ともすると思っただけで走り活動が拡散・散逸したり、成果が現れ皆にもてはやされるようになると本来の目的を見失ない慢心に陥ることがままあります。

しかしながら、現在の里楽暮住しもやま会のデータに基づく活動の進め方は、このまま続いていけば確実に「里」の恵みと地域の絆に包まれて、自分らしく(楽しく)暮らし(住み)続けられるまち」にどんどん近づいて行くだろう、と思います。お話を伺って、本当に感心しました。

■倉地会長のキャラクター

とても印象的だったのは、倉地会長の話す姿でした。見た目はクールでとてもリアリスト、理論に裏打ちされたクレバーな活動の原動力は大好きな故郷と将来世代へのホットな思い。

また、倉地会長はこれまで生まれてこのかた60年以上にわたり下山にずっと住み続け、また某大手企業に勤めていた頃から「ミネアサヒ」を無農薬・無化学肥料でこだわり栽培した特別栽培米「香恋(かれん)の田んぼ米」をしもやまブランドとして生産する活動を実施されてきたとのこと。

まさに、「香恋の里しもやま」への地元恋、いや、地元愛に生きる、誰よりも真剣なリーダーです。

■前向きに、前向きに

「“里”の恵みと地域の絆に包まれて、自分らしく(楽しく)暮らし(住み)続けられるまち」を目指して…

『しもやま住んでみりん定住促進計画』に記される「里楽暮住しもやま会」の語源となった言葉は、フンワリしてとてもキレイですが、一方で、今、下山が直面している課題を解決することは綺麗事ではないでしょう。

でも、その大変な課題を地域一丸となって克服し、子どもたち・孫たちに「こんなに魅力的で素晴らしい故郷なんだぞ〜」と、大勢のお年寄りが誇らしげに闊歩する下山が見られるのか！と思うと、とてもワクワクします。

ワクワクな結果を目指す上で、下山地区は今一度の「地域の絆」が試されているのだと思いますし、下山なら必ず乗り越えていける、と期待しています。



会の事務局がある豊田市役所下山支所にて
倉地会長(右)と取材者(左:近藤)



倉地会長オススメ 下山支所近くの食事処
「洋食の店ふる〜る」のランチを食す取材者(清水)

矢作川天然アユ調査会

調査団体名	矢作川天然アユ調査会	団体代表者名	会長 新見克也
設立年	1996年9月	対応してくれた人の名前	新見克也（株）矢作新報社 代表取締役
団体URL	http://www.ayu-chosa.net/		
活動拠点	豊田市矢作川研究所内	調査員	浅田益章
取材日	2018年2月15日(木)	レポート作成者	浅田益章

活動内容

(設立の目的)

矢作川では平成に入ってから以降アユが釣れなくなっているため、この原因を探り天然のアユが豊富に釣れる矢作川を復活させようと考えています。そのため豊田市矢作川研究所と共に、アユを指標にその生活史の調査を行っています。矢作川の釣り人を中心とした団体です

(事業内容)

春の遡上調査に続き、友釣りによる調査、秋の産卵場調査ならびにふ化直後の仔魚の調査、そして三河湾での調査とアユの一生を追跡しています。調査結果をもとにアユの生息上の課題を抽出し、アユの保全のための研究を展開するとともに、アユを通じて河川環境の保護に向けた提言につなげることを目指しています。

キャッチフレーズ

遡れ！天然アユ

故郷の大河、矢作川に本当の清流と天然アユの復活を願う。
さまざまな生き物がすみやすい矢作川を取り戻してゆきたい

会のモットー

矢作川の釣り人が中心ですが「研究者のはしくれ」との意識を持って
日ごろの調査に取り組む

設立から現在に至るまで変化したこと

調査会は22年前に設立された。昔は天然アユの宝庫であった矢作川が年々変わってきた。この10年は遡上してきたアユが一気に育たなくなってしまう。天然アユは減っていないのだが育たない。矢作川中流域の川底の砂や小石が減少し、健康できれいなアユの餌場がなくなって居なくなってしまう。50年前に作ったダムの影響でアユが育つ川底でなくなった。

連携している団体・専門家・自治体など

「天然アユ生態調査実行委員会」(会長:矢作川漁業協同組合 組合長 事務局:豊田市矢作川研究所)のもとに産官学民の各団体が参加して連携している。

- ・豊田市 矢作川漁業協同組合
- ・国交省 豊橋河川事務所
- ・豊田市矢作川研究所
- ・大学のアドバイザー(教授)、専門の研究所、ほか

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ①遡上調査: アユの遡上数を把握。その年の矢作川での資源量を推察。大きさ等の計測。
- ②成長調査: 友釣りによる定点サンプリング。アユのサイズ、天然の判別、釣れ具合の観測。
- ③産卵場・流下調査: 翌年のアユ資源量を推測するためのデータ収集。産卵場の位置を探る
- ④三河湾調査: 三河湾でアユの仔稚魚を採捕し、環境条件や当年の資源量、生育の予測。
- ⑤矢作川感謝祭: 毎年9月開催。矢作川の天然アユを釣り、焼いて、市民は塩焼きをいただく。

現在直面している課題

①矢作川中流域:アユが釣れなくなった要因調査

- ・中流域はアユの餌場である川底の石が大きく絶好の釣り場であるがここ10年ほど深刻な不漁
- ・ダム下流で見られる「アーマー化現象」の典型。健康な川では洪水のたびに川底が洗われるが砂や小石がないためにコケ植物が川底を覆っている。餌となる付着藻類が育たない

②矢作川下流域:川相の平坦化と外来種オオカナダモの大繁殖・駆除対策

- ・オオカナダモは河川勾配が平坦、緩やかで光環境がよいところに育つ。駆除には大変苦勞する
- ・平戸橋下流部から豊田大橋の間の川面の景観を損ねている。アユ生育の河川環境を確保したい

今後やってみたいこと

「健康な川底の創出」 ソジバ再生実験(2年計画 2017.05-2019.03)

①阿摺(あずり)ダム下流(通称ソジバ)でアユの生息環境改善の実験を継続中。

(豊田市矢作川研究所) 以前はアユがよく捕れた場所でソジバと呼ばれていた。現在は全く釣れない。その追跡調査を市民グループである「矢作川天然アユ調査会」が友釣り調査で協力する。

②矢作川ダムができて30年も経ってから川底の異常が顕著に表れはじめた。最近の10年ほどで急速に悪化している。末期症状だ。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・矢作川の天然アユが育たない現象が顕著になってきた。その対策には矢作ダムを管理する国交省や中流域の小型ダム群(発電)を管理する中部電力(株)が今回の実験結果をどう受け止めるかが問われる
- ・オオカナダモの抑制、駆除活動の継続には豊田市民への広報啓発など理解と参加活動が大事である

(感じたこと)

実験結果の検証など多くの連携が望まれる。データ情報の共有も大事である。「天然アユ生態調査実行委員会」を中心に関係者が繋がっている。矢作川流域圏懇談会も貢献できるのではないかな

チームオリジナルの質問

<質問内容>

訪問取材をして一番興味深かったことは、矢作新報社の代表取締役である新見克也さんであった。社名のいわれは？ 経歴と今の仕事。名刺には矢作川漁業協同組合 専務理事とある。そして「矢作川天然アユ調査会会長である。まだまだ本業の傍らいろいろなところとつながっている。地元豊田・矢作川の流域圏を担っているキーマンの一人ではないだろうか。

<答え>

社名のいわれは公募で決めた。社の目指すところは「山から海まで矢作川流域全体を扱いたい」豊田市で生まれ、高知市で魚類調査の仕事と実践研究をして地元に戻ってきた。矢作新報社に入社したころは豊田市矢作川研究所ができたころでした。矢作川の豊かな自然と地域住民を守ろうという機運に満ちていたころである。

「矢作川水族館のこと」(発起人のひとり; 川の魅力・川の実力を伝え、人と川を繋げます)

「矢作川天然アユ調査会」だけでは矢作川の魅力を発信することは片手落ちである。バーチャルの矢作川水族館を作った。子供たちと「矢作川さかな釣り大会」を開催。釣った魚など検量後水族館へ。公害問題を克服再生された今、矢作川アユのブランド化よりも、まずは豊田市民に関心を持ってもらうことが大事と話されました。

その他、伝えたいこと（教えていただいたこと）

①アーマー化現象、アーマーコートとは：

矢作川のアユが釣れなくなった原因の1つは川底のアーマー化現象とのこと。
ダムの下流では、流れやすい小さな砂利が流され、流されにくい大きな石がごろごろと目立つようになります。これを専門家は「アーマーコート化（鎧化）」と表現します

怖いのはその後、時を経て川底がアユなどの生き物が住める場所でなくなっていくことです。
時々洪水が川底を清掃してくれないと。最後は餌にならないコケ類が覆ってしまう。そうならないように対策が必要です

②矢作川天然アユのこと：

- ・矢作川天然アユのことは釣り人仲間はよく知っている。秋になると（9月から）釣りに来る
- ・アユが釣れなくなったので舟で釣る人が減った。今は岸からのほうがよく釣れる

③ソジバ（アユの餌場）の問題とは：

ダムがなかったころの昔はアユがたくさんいるところをソジバと呼んでいた。ソジとはヨシなどを束ねたアユを捕るための仕掛けのことである。川底の砂や石の流れの変化で様相が変わったことからアユがいなくなった。

矢作川や天竜川は飛騨川と比べて格段に少なくなったようです。

写真

取材風景（2018年2月15日）

（① 矢作川天然アユ調査会会長の 新見克也さん）

（株）矢作新報社の代表取締役であり、編集長。

矢作川近辺の活動に関わり多い。
淡水魚類の調査が得意。



（注）

写真・資料は矢作新報社および
矢作川天然アユ調査会のものです。

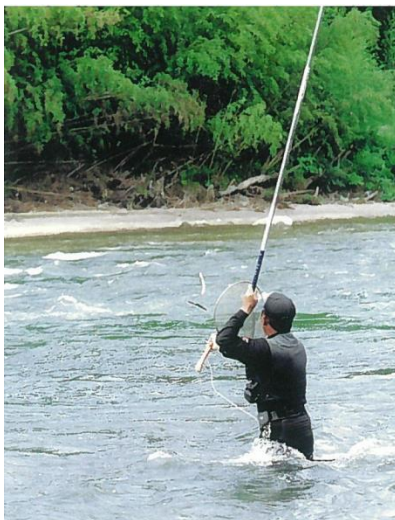
活動状況



② アユの生活史



③ 矢作川（上流）



④ 成長調査
(定期的な友釣りによる採集・釣果比較)



⑤ 産卵場調査
(産卵の時期と産卵場の川床状態)



⑥ ダム下流のソジバ再生実験・記事
(矢作新報・2018年2月2日号より)



平成8年9月 調査会発足(6日)
 (柳西日本科学技術研究所生物室長(当時)
 高橋勇夫氏の指導のもと調査開始)
 平成8年～11年 矢作川アユ生態調査
 平成11年 16項目天然アユ保全策を提言
 平成12年～現在 三河湾でのアユ生態調査
 平成17年 10項目天然アユ保全策を提言
 平成16年～17年 矢作川に天然アユ大量遡上・豊漁
 現在に至る

⑦ 矢作川天然アユ調査会
(メンバーと沿革)

矢作川漁業協同組合中和支部

調査団体名 : 矢作川漁業協同組合中和支部
 設立年 : 1902(明治35)年
 団体URL : <http://yahagi-ayu.net/>
 活動拠点 : 愛知県豊田市平戸橋町波岩87
 取材日 : 2018年 1月 9日

団体代表者名 : 支部長 大津建男
 対応してくれた人の名前 : 支部長:大津建男、副支部長:
 水野耕次、会計:中島元三
 調査員 : 山本幸泰、松山康忠
 レポート作成者 : 松山康忠

活動内容

- ・竹の伐採、除草
- ・おとり売り場でのアユ釣り大会
- ・子供たちの放流体験
- ・魚道の鵜対策(越戸ダムの魚道への糸張り)
など

キャッチフレーズ

川と親しみ、川を楽しむ

会のモットー(何を大切にしているか)

どうしたらアユが昔のように釣れるようになるかを考える

設立から現在に至るまで変化したこと

今から17年前から竹を切りだした。川が見えるようになるとみんな手伝ってくれるようになった。
 その後、豊田市の尽力で水辺愛護会もできた。
 東海豪雨のときに古い橋が流れ、矢作ダムから持ってきた砂で進入路を作って工事をした。進入路を残してもらったところ、洪水があると進入路の砂が流れアユが釣れた。
 今は上流から砂が流れてこない。河床が深くなり、岩盤になってしまっている。
 山の石に着くようなコケが川の石に付く。アユが釣れなくなった。
 川鵜、ブラックバスが増えアユが食べられている。
 昔は古川の対岸で子供を対象にアユのつかみ取りをやっていたし、船でお祭りや花火もやっていた。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市矢作川研究所。地元の町内自治区。

現在直面している課題

- ・アユ釣り客の減少
- ・組合員の高齢化

今後やってみたいこと

元気なうちはアユを釣る。現地での釣り方教室。



取材状況(左から、大津さん、中島さん、水野さん)



【作業後の状況】
ソジバ下流 鵜が集まらないように県道から見通し良くした



支部員での草刈り



児童によるアユの放流



コケ除去作業



釣り大会

古巣水辺公園愛護会

調査団体名 : 古巣水辺公園愛護会

設立年 : 1993(H5) 年

団体URL : なし

活動拠点 : 古巣水辺公園

取材日 : 2017年12月4日(月)10:00~11:30

団体代表者名 : 村山志郎

対応してくれた人の名前 : 村山志郎

調査員 : 山本孝之・吉橋久美子

レポート作成者 : 山本孝之・吉橋久美子

活動内容

現在市内に19ある「水辺愛護会」の先駆けとして1993(平成5)年に設立され、長きにわたり、途切れることなく活動が続いている。

活動地である豊田市扶桑町の川辺は、かつて、洗い物や竹や草の採取、川遊びなど、地域の人々の暮らしになくてはならない場所であった。しかし高度成長時代以降、人があまり近づくなくなったことやダムの建造等による川の姿の変化などにより竹が水際まで繁茂していた。

そのようななか、近自然工法の水制が整備されたことをきっかけにこの地を公園として整備・維持しようという気運が高まり、住民による愛護活動が始まった。会は最初の水辺愛護会であるだけではなく、次に設立された「波岩水辺公園愛護会」の立ち上げにも関わるなど、市民が矢作川の川辺の眺めを良くし、人が川に近づける空間を取り戻し、維持していくというムーブメントを起こしたといえるだろう。

- ・初期: ひたすら竹伐開・焼却と除根で広場づくり
- ・昨年まで: 公園利用のための月1回草刈り(4月~12月)、ゴミ処理
- ・2017年度から: 地域住民の憩いの場として現状維持するため2カ月に1回草刈り(4月~12月、年5回)、ゴミ処理

キャッチフレーズ

生活環境を快適に、故郷の誇りとなる風景づくり

会のモットー(何を大切にしているか)

広場の現状維持

設立から現在に至るまで変化したこと

古巣水辺公園は開かれた公園として各地から来訪者があり、筏下り大会の出発地点や、「矢作川「川会議」」の会場として活用されたりもしてきた。騒音やゴミの問題等も起きたが、その都度対応をしてきた。

しかし住民の要望があり、2017年度からは外部の人に積極的に開かれた公園ではなく、地元住民のための広場へと方針を転換した(駐車場、入り口トイレの廃止)。作業日数も削減した(1回/月)→(1回/2か月)。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、地域資源の活用など)

地元住民のための活動であり、流域圏というような広域的な考えはない。

現在直面している課題

草刈りを真面目にやってきた結果、樹と砂しかない広場になってしまい、矢作川研究所から要望されていた生物の多様性ある空間づくりになっていない。しかし、長い目で見てその時代時代の住民が考える空間にしていけばよい。個人的には自然生態優先の河畔林を模索したい。

今後やってみたいこと

1. 現状環境を維持する
2. 会員や地元住民の気持ちの変化に対応して維持方針を見直す。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

除草機械購入費用～夏場の肩掛け式草刈り機の作業はしんどい。ある程度の機会化費を検討してほしい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

山も農地も維持管理に対して補助金が出る時代になっている。河川区域には出ないがどう思いますか？

<答え>

川に対しても豊田市内に愛護グループがたくさんできてきたので市は支援ルールを柔軟に見直してほしい。

その他、伝えたいこと

愛護会活動は河川法を意識して行っている。活動内容は市に届けて河川管理者(県)から包括的に市が許可を受けている。したがって、会としては生物多様性は意識していないが、河川としての自然生態回復を意識した、地元のためのふるさと活動を目指したい。

【その他】

県が施工した巨石水制工は、完成後に先端部の沈下が始まり、東海豪雨でも被災した。河床低下を何とか止めてほしい。古岸側の岸が浸食されている。将来的にはダムからの土砂供給が必要と思うが今から取り掛かっても20年はかかるだろう。当面、中洲の土砂を掘削して古岸側へ盛り土することで流れの圧力を西側にも分散してほしい。

写真

取材風景



2017年8月撮影



2017年12月撮影

活動風景(2015年9月5日)



橋の下世界音楽祭実行委員会

(タートルアイランド×マイクロアクション×火付けぬ組)

調査団体名 : 橋の下世界音楽祭実行委員会
 設立年 : 2012年
 団体URL : <http://soulbeatasia.com/>
 活動拠点 : 橋ノ下舎(豊田市西町・コンテンツニシマチ内)
 取材日 : 2017年 12月 13日

団体代表者名 : 永山愛樹
 対応してくれた人の名前 : 永山愛樹
 調査員 : 近藤朗、服部朋悦、内田雅之、洲崎燈子
 レポート作成者 : 洲崎燈子

活動内容

2012年から1年に1回、矢作川河川敷の千石公園(豊田市千石町)、豊田大橋の下を中心に「橋の下世界音楽祭」を開催している。この音楽祭は(2014~17年は)5月の週末の3日間開催され、国内外の多様なジャンルのアーティストがパフォーマンスやライブ、ワークショップ等を行う。ステージを3つ組むが、メインステージは河川敷の竹を自分たちで伐り出して作っている。会場には大小のインスタレーションが並び、日本全国から集まった出店者たちが軒を連ねる。入場料を取らない投げ銭形式(+協賛金)で運営。スタッフは15~20人で、永山さんが率いるバンド「タートルアイランド」とタートルアイランドのマネジメントをしているマイクロアクション(横浜)のメンバー、地元住民らで構成されている。

この音楽祭を始めたきっかけ

2011年の東日本大震災の後、西日本の音楽仲間たちで度々被災地を訪れた。物資を運んで往復したり、ずっと滞在する人もいたが、自分たちでやることには限界があるし、自分の家賃を払うのもきつい中でボランティアをするのは...と一度引き揚げた。この時、「一度自分たちの生活を見つめ直そう。自分たちの原点って何?」と考えた。今、身近な音楽も、食も生活スタイルもほぼ西洋が基準。東洋のものを見直そうと考えた。西洋の基準一辺倒にするのは自分たちに合わないし、無理があるし、癪。西洋の音楽は合理的だが、東洋の音楽はのびのびして面白く、劣等感を持つ必要はない。自分たちの属する東洋、アジアを身近に感じられる祭りをつくろうと考えた。

矢作川の川辺を開催場所にした理由

この場所は子どもの頃から音楽の練習やBBQをやったりする身近な場所で、いつかお祭りをやりたいと思っていた。川に来る人はさまざまで、走る人や読書する人、休憩する営業マン、夜は不良少年たちが来たりもする。一種の逃げ場で、まちなかにはそういう場所が一ヶ所は必要。川は誰でも行けて、楽しめる場所。また、何か失敗しても「流せる」ので、お祭りをもってこいの場所。昔から川辺では文化が生まれてきた。

キャッチフレーズ

皆でつくる、自分らの祭り

会のモットー(何を大切にしているか)

この音楽祭は野外フェスではなく、1年に1度自分たちを浄化し、地固めするための手づくりの祭り。矢作川で、普段の生活ではできない「実験」をしている。



橋ノ下舎でライブを行う永山さん(2016.9.15)

設立から現在に至るまで変化したこと

出店者やお客さんが変わった。このお祭りは皆でつくると言う意識が浸透し、提案したり自分たちで考え、自治し出した。最初は風、土埃や虫を何とかしろと言ってきた人もいた。今年は一ヶ所しかない水場の排水状況を改善してくれた人がいた。今は全店舗が電気を自前で何とかしている(出店者が充電器を持参したり、使わずすむよう工夫したり)。こんなイベントは世界でここだけではないか。

連携している団体・専門家・自治体など

慧通信技術工業(株)(神戸)...約一億円のパーソナルエナジー(太陽光発電によるオフグリッド独立電源システム)を無償で提供。

RA-energydesign(東京)...ソーラー音響。

山形の蔵王龍岩祭実行委員会...メインステージの音響機材提供。

(株)豊田スタジアム...備品の貸与。

豊田文化振興財団...書類申請。

100~200人のボランティアスタッフ...口コミ、飛び込みで来る人も多い。Tシャツと賄いを提供するが、いらないという人も。

この音楽祭の趣旨に賛同し、多くの人や組織が手弁当でサポートしてくれている。ノーギャラ、旅費・食費・宿泊費のみで来てもらったアーティストのイベントに、ノーギャラで出演したりしている。また、年間を通じ会場の千石公園で河畔林整備をしているNPO矢作川森林塾には敬意を表して、可能な範囲で作業のお手伝いを行っている。

現在直面している課題

- ・お金。日本中のフェス関係者が、この規模のフェスでどうやったら儲かるのか聞きに来るが、誰も儲かっていない。3年前まで毎年300万円位の赤字が出て、CDやライブの売上で補填していた。今はトントン、持ち出したものが賄える程度。気持ちと気合いだけでやっている。
- ・トイレ。いくらあっても足りない。仮設を増やすしかないが、運搬等が大変。
- ・車の動線。子どもが心配。駐車場を会場外にできればいいのだが。

今後やってみたいこと

- ・もっと祭りの内容を考えたい。だんだんその時間がなくなっている。参加型の企画をもっと増やしたい。
- ・今はメインステージの建て込み(舞台づくり)をできる人が限られているので大変。ワークショップなどを行い、舞台づくり、設営、撤去ができる人を増やしたい。
- ・川をもうちょっと使いたい。対岸と行き来できる、筏などを使った渡しができないだろうか。3日間でねぶたのような大きな山車をつくり、アジア諸国の書家に字を書いてもらって、最後に川の上で燃やしてみたい。
- ・子どもたちだけで運営するエリアをつくりたい。公募をかけてマネジメントや音響も子どもたちにやってもらう。ある年に参加した子が、翌年参加した子にやり方を教えられるといい。
- ・今年はミズベリング(行政による水辺空間活性化プロジェクト)の一環として開催したが、今後もっと関わるといい。



チームオリジナルの質問

<質問内容>この音楽祭をいつまで続けたいと思っていますか？

<答え>

最初は勢いでやっていたが6年目になり、歳も取るし、生活もあるし、準備に半年かかるしと大変。でも一応、死ぬまで続けたい。やらない年があってもいいし、名前を変えて小さく開催してもいいし、地元中心の祭りにしてもいい。でも、マンネリになったらもうやらない。実験ができなくなったら終わり。

<質問内容>この場所、橋ノ下舎(はしのしたセンター)について教えてください。

<答え>以前は土橋でお店をやっていた、祭りの前に作業したり泊まり込んだりしていた。そこがなくなり、昨年改築されたこの建物(コンテンツニシマチ)に来ることになった。皆でカンパし合い、内装などの工事もやった。祭りは年1回だけなので、持続的に腰を据えて続けることをここでやりたい。仲間たちの避難所、駆け込み寺、寺子屋、公民館のような存在。酒などの売り上げを運営費に充てている。ライブの他にアトリエ、ギャラリー、寄席、ミニシアターなどとしても使われている。

取材者の感想

矢作川の川辺の、それまで誰も思いもよらなかった新しい魅力を引き出してくれた、妖しくも楽しい「橋の下世界音楽祭」。永山さんの音楽仲間を含め、この音楽祭が初めて矢作川を見るきっかけになったという人がとても多いそうです。このイベントが野外フェスではなく、「自分らのお祭り」として手づくりされていたということに感銘を受けました。永山さんの、「音楽も絵も、芸能もお祭りも、本質的にはこうなってほしい、こうあってほしいという“祈り”だ」という言葉が心に残りました。また、このお祭りが実験の場であるというお話になったとき、取材者の近藤さんから「全てのものが限られている、という意味では、社会も地球も実験場だね。」という言葉が出て、なるほどと膝を打ちました。ひょっとして世界の縮図なのかもしれない、この破天荒で最高に魅力的なお祭りから、今後も目が離せません。

橋の下世界音楽祭アルバム



ぬかた体験村

調査団体名：ぬかた体験村

設立年月日：2017年10月7日

団体URL：

活動拠点：岡崎市石原町 カフェ柚子木

取材日：2017年12月21日

団体代表者名：ぬかた体験村 村長 赤松弘一

対応してくれた人の名前：赤松弘一

調査員：浅田益章 沖章枝

レポート作成者：沖章枝

活動内容

2017年10月7日にオープンしたばかりの『ぬかた体験村』で、矢作川流域圏懇談会山部会のフィールドワークがあった。体験村スタッフの指導の下、参加者全員がユズ畑に行ってなるべく青い実を一人10個摘んできて、すりおろし、ペースト状の青とうがらしと混ぜ合わせて作る“柚子こしょう作り”を体験した。普段したことのない作業はとっても新鮮で、作ったことがなかった製品の柚子胡椒は宝物に思えた。

体験メニューは、この他に、柚子シロップ作り 柚子狩り、体験村で平飼いされている岡崎おうはん(地鶏)の卵を使ったプリン作りなどなど。季節に応じて、春は茶摘みや山菜摘み、夏は川遊びや尾根歩き、木こり講座、冬は餅つき、随時、鶏の餌やりもある。

岡崎市観光課が岡崎市の特産品の普及と山里生活体験をテーマにしたバスツアーで観光客を呼び込んでくれている。

キャッチフレーズ

自然のままに！ 環境にやさしく、自然にやさしく、人にやさしく

会のモットー(何を大切にしているか)

生まれ育った場所を生かす。親や先祖の想いを大切にする。

同じ思いを抱くものが協力しあって、森のざわめき、川のせせらぎ、小鳥のさえずりといった自然の恵みを生かした新しい岡崎の顔となるような事業を展開したい

設立から現在に至るまで変化したこと (設立までの道のり)

30年前、親世代は化学肥料と農薬で土を駄目にしていることに気づき、お茶の木を切って8人の仲間と農薬を使用しないで生産ができるユズの木を1000本植えた。生産組合を作ってユズを出荷してきた。年金にプラスアルファの収入があればよいというぐらいの考えだった。赤松家の家業はプラスチックの成型やコーティング。他にもアイデアマンの父親は阪神淡路大震災の被害に心を痛め、耐震ウッドシェルターベットを製造し、東京や大阪などの大都市に販売してきた。木製品が好きで持ち山の木を使用してログハウスも建築した。体験村の村長は3年前、住居を街中のマンションから実家に移して、ログハウスでカフェ柚子木を始めた。この時、ユズを活かしていくことを決めた。ユズ生産組合の人々は亡くなったり現役から退かれています。

連携している団体・専門家自治体など

岡崎市観光課...宣伝をして、バスツアーの観光客を誘致してくれている

JR...愛知県内の市町村へ全国から観光客を招こうという企画の募集があって、『柚子の取り組み』で応募をしたところ採用されたので、鉄道を利用した観光客を呼び込めると思う。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

◆六次産業申請に3回チャレンジして駄目だったので、独自ではじめたが結果的にはこれでよかったと思っている。

◆18年春には岡崎おうはんの卵を使用した長崎カステラの製品化と販売を目ざしている。

◆18年5月にスタートが決定しているが、額田商工会の飲食業の会員と連携して『岡崎かき氷街道』を開催する。

メニューはそれぞれ自由だが、シロップは人工着色料いっぱいでない、自前の特に額田産ものを使うことを条件としたい。

現在直面している課題

かき氷に地元の湧水を使用したいけれど、保健所の規定では許可された製氷業者の氷しか使用できない。地元で製氷業者がいない。地域ならではの意義がなくなるので、参加店と協議をしている。(その後、地元の蔵元柴田酒造の神水使用が決定した)

今後やってみたいこと

- ◆ホタルの観賞ができる川床づくり
- ◆柚子卵・・・岡崎おうはんの餌にユズの皮を混ぜるとユズの香りがする卵になる。
- ◆地元食材を使ったファーストフード。ドライブやサイクリングで訪ねた人が気軽に立ち寄って自然を満喫しながら食べられるような岡崎おうはんやジビエのバーガーなど。
- ◆耕作放棄地・林間地を利用して薬草になるヨモギやスギナなどを育て加工、製薬会社へ出荷すること。異業種の仲間が20～30人集まっているので、廃屋を拠点にしているのではないかと考えている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

取り組みができるような情報や知識。
目標に向かって同じ気持ちで取り組めるメンバーが欲しい。
ボランティア地域協力隊員。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞ 尊敬する人は？

＜答え＞ 父親と、お茶の木を切ってユズの木を植えてくれた地域の人々。そのお陰で、いま自分がユズを生かしたことが出来ている。

チームオリジナルの質問②

＜質問内容＞ 里山の環境としてどんな状況が望ましいと思われるか？

＜答え＞ 人だけとか特別な生き物だけ大切にされるのではなく、さまざまな生き物が共存共生できるような環境。例えば、清流の指標生物といわれるゲンジボタルは、カワニナの数によって生息数が決まるといわれる。カワニナは水がきれいすぎでは生きられない。人の残飯などが流れ込むちょっと汚れた川を好む。自然界は微妙なバランスで成り立っていることを謙虚に受け止めてゆきたい。

その他、伝えたいこと

岡崎かき氷街道の計画も他のことも、地域外の大勢の人に旧額田町の素晴らしさを知ってもらいたい、知らせる切り口になるといいなあと思っているから。山あり、清流あり、渓谷もある。名木もあるし自生する花の群生地もある。遺跡も寺社仏閣もある。鳥や生き物もいる。そして、人びとが生き生きと暮らしている。世間の人のさまざまな期待に答えられる環境があることを知らせたい。

取材風景 (2017年12月21日)

(①)ぬかた体験村

岡崎市石原町帝口38
カフェ柚子木

くらがり溪谷に近い県道37号線から
脇道に入ってちょっとのところ。
(村長 赤松弘一さん)



① 柚子園・イベントコーナー:
道路左側



② カフェ柚子木:
正面、道路右側

活動状況(1) 今回の取材訪問



③ オープンして2か月の訪問



④ 楽しい雰囲気のカフェで取材。



⑤ わ紅茶にあう。柚子のお菓子



⑥ ⑦ 額田産の食材による額田の味覚: 地鶏の岡崎おうはんの卵料理



⑧ 自然農園でのユズ狩り体験案内

活動状況(2) 開村直後の訪問。体験



⑨ ⑩ ⑪ 10月14日に矢作川流域懇談会(山部会)メンバーで初訪問しました。
自然豊かなゆず園でゆず狩りを体験。イベントコーナーで「ゆずこしょうづくり」に挑戦。

有限会社 ファナビス

調査団体名	： (有)ファナビス	団体代表者名	： 稲垣光威
設立年	： 1999年	対応してくれた人の名前	： 稲垣光威
団体URL	： https://www.majigire.net		
活動拠点	： 岡崎市小呂町字三乃己田36-11	調査員	： 浜口美穂、沖 章枝、曾我部行子
取材日	： 2018 年 1月15日	レポート作成者	： 曾我部行子

活動内容

綿(わた)を種から育てる人、その綿をがら紡で紡いで糸にする工場、動力織機で織る工場、和ざらしの工場など、点として細々と残っていたそれぞれの仕事を繋いで、企画→製造→販売を行っている。

製品例：がら紡布タオル・ハンカチ「三河布史(みかわぶし)」、純木綿布ナプキン、純木綿ゆるゆる5本指くつ下「けっこう快適」、ウールガーゼ・セーター「羊品(ひつじひん)」、ウールガーゼ・ボディウォーマー「あっため得るウール」など。

キャッチフレーズ

布の地産地消をめざす

会のモットー(何を大切にしているか) お客さんとは双方向で！

自分たちで作ったものを直接使う人に話をしながら手渡したい。お客さんを単に消費者にしない売り方をしたい。長く使った品物を自分流にリサイクルして使っている話を聞くと、それこそ望むところと嬉しい。毎月21日、京都・東寺で開催される弘法市に出店している。お馴染みのお客さんもできた。

設立から現在に至るまで変化したこと

元々、滝町の紡績業を営む家に生まれたが、自らは繊維商社に勤め、1991年に退社。その後数人で生地卸会社をやっていたが、そのときは合繊や化学染料の製品を扱っていた。1999年一人でファナビスを始める。がら紡自体が機械化に押されて廃業化し、繊維業が海外の資本集中型の巨大工場に移行する中で、分業で成り立ってきた地域産の繊維業が、さらに廃業に追い込まれている様子に「布の地産地消」をめざし、2005年には、基本に戻るという意味を込め『本気布』(マジギレ)プロジェクトをスタートさせた。

連携している団体・専門家・自治体など

地産地消で製品化するために、綿を続けて作ってくれる人を探すことから、糸・織りや、洗い屋などの分業している人を探して繋いでいる。無農薬で綿をつくってくれる方と協力して、一緒に保育園などで綿のワークショップを行っている。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動

大人と子どもを対象にワークショップを行っている。子どもには、繊維が綿(種)という植物から始まることを話す。大人には、原料の綿生産が持つ影の面、農薬使用などについて話す。様々な年代に、繊維から見た明治維新・アヘン戦争・南北戦争などの歴史の事実を話すと、興味を持ってもらえる。

現在直面している課題

綿(わた)も自分たちでつくって完全な地産地消をめざしているが、収益を上げられないため綿生産を継続できない。したがって、綿は輸入品に頼らざるを得ないのが現状。

今後やってみたいこと

安定化するため、ガラ紡の機械を入れたい。日本でとれた綿で製品を作りたい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞ がら紡とはどんなものですか。

＜答え＞

1873(明治6)年ごろに日本で元僧侶、臥雲辰致によってイギリスから輸入された機械紡績に対抗して、手紡績道具を改良した紡績法である。紡績糸綿を入れた筒を回転させ少しずつ引き出して糸を紡ぐ。ガラガラと音がすることから名前がついた。水車を動力に木綿の産地で普及したが、西洋紡績法が主流になると減少した。物資不足の戦後直後は重用されたがその後衰退した。このあたりの地域では三河地方で発達した。機械の構造は簡単で、打綿した綿花をブリキ製の綿筒の中に入れ、回転させながら上へ引き出すと、撚りのなかった太番手の綿糸ができるので、それを枠に巻き取る。その際にガラガラと音がする。(稲垣さんのお話を朝日新聞掲載「キーワード」の解説で補った。)

がら紡の特徴

繊維が短く捨てられてしまう「落綿」を使用できる。撚りが甘く不均一なでこぼことした糸は、手紡ぎ糸のような味のある風合いがでる。ふんわりと柔らかい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞ 稲垣さんにとって、ファブリック(布・衣服)とは何ですか。

＜答え＞ 流行のないもので、ファッションとしてはみていない。一番多いアイテムの衣服を考え直したい。

人間が壊してきた環境ではあるけれど、折り合いをつけて、なるべく壊さない日常を心がける中のファブリックでありたい。

その他、伝えたいこと

稲垣さんは、娘さんが仕事を手伝ってくれるようになったことを心強くされていた。『本気布』をマジギレ、がら防布 三河布史(みかわぶし)、ウール製品を羊品(ひつじひん)、あつため得るウール、など楽しいネーミングは、家族で知恵を絞った結果ということだった。

写真



稲垣光威さん



取材風景

ファナビスのチラシは、一緒に仕事をする娘の真凜さん担当



ワークショップで使う糸車

NPO法人岡崎まち育てセンター・りた

調査団体名 : 岡崎まち育てセンター・りた
 設立年 : 2006 (H18) 年
 団体URL : <http://www.okazaki-lita.com/>
 活動拠点 : 岡崎市内各所 (乙川、松應寺横丁等)
 岡崎市地域交流センター (市内6か所)
 取材日 : 2018 (H30) 年1月16日 (「りぶら」にて)

団体代表者名 : 米津 眞 理事長
 対応してくれた人の名前 : 天野 裕 事務局長
 事務局 : 岡崎市六供町字杉本 78-1
 調査員 : 近藤朗、中田慎、服部朋悦、
 沖章枝、三ツ松由有子
 レポート作成者 : 近藤朗

活動内容

岡崎まち育てセンター・りた (以下りた) は、岡崎まちづくり市民公社 (1996年設立)、岡崎CDC研究会 (市民参加型まちづくりを目指す有志グループ、1999年発足) の流れを汲み、2006年に設立されたNPOである。当時の柴田紘一市長が公約として掲げた「市民協働社会」実現のために設立した公設民営組織であり、岡崎市市民協働の拠点となる地域交流センターの運営受託 (指定管理者)、地域自治支援事業、中心市街地再生支援受託事業などを皮切りに様々な活動を展開してきた。

活動の柱は、「市民活動支援」と「まち育て推進」である。スタッフは60名を超え、内50名程が市民活動支援チーム (指定管理業務) に、後はまち育て推進チームが市民と行政の仲介役として、ワークショップなど展開しながら魅力ある岡崎のまちづくりを進めている。活動は多岐にわたるが、その内容を知るための情報発信ツールとして「Litaracy」 (隔月発行) がある。

● **市民活動支援チーム** … 岡崎市の地域交流センター5か所の運営と図書館交流プラザ (りぶら) 市民活動センター事業を受託し、計6か所の拠点により地区まちづくりを推進している。地域交流センターは、なごみん (北部)、よりなん (南部)、やはぎかん (西部)、むらさきかん (東部)、悠紀の里 (六ツ美分館) と旧岡崎市内に配置されている。これらの運営に当たっては市民参加型を基本としている。

● **まち育て推進チーム** … 岡崎市内全域を活動エリアとして、まちづくりフォーラムやセミナー、情報交換の場づくり、その他イベント・まちづくり活動の支援など実に多様な取組をしてきた。その中で新たな展開を迎えたのが、松應寺横丁の空き家活用及び高齢者支援の取組や、現在の内田康宏市長 (2012就任 ~) が公約に掲げた「乙川リバーフロント地区整備」 (2013年基本方針策定、2014年基本計画発表) に関わった事であり、主にソフト、デザイン面からプロジェクトに命を吹込む役割を果たし、あるいは果たそうとしている。キーワードとなったのが、「新たな公共支援」である。

● **これから おとがわプロジェクトと共に** … 乙川リバーフロント整備を民間・市民主導で進めて行くためのまちづくり手法として「おとがわプロジェクト」が2015 (H27) 年に開始され、りたがその調整役を担っている。市民も含めた議論・ワークショップを経て、同年「乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン基本構想」が策定され、新たな魅力ある公共空間の活用を実現するための社会実験として町中の「めぐるQURUWA (くるわ)」、そして2016年からは乙川河川敷を活かした「おとがわ！ ンダーランド」を展開、様々な挑戦をしている。

キャッチフレーズ (天野事務局長)

公共空間を使って社会課題を解決する！

- ・ おとがわプロジェクトなどで実践中、魅力あるまちづくりのための仮説とそれに基づく「社会実験」が必要

会のモットー (何を大切にしているか)

市民が中心となって、専門家や行政とも協働してまちをつくる社会を目指す中間支援団体「**まちのミカタ**」である「**つなぐ**」、「**(まちづくりの担い手を) 育てる**」、「**場をつくる** (まちの魅力の共創)」がテーマ

● **設立前** … 1999年に発足した有志グループ岡崎CDC研究会に、後に「りた」で主要な役割を果たす三矢勝司（「りた」設立、前事務局長）と天野裕（現事務局長）が参加していた。二人は共に岡崎市出身であり、関東で都市計画、建築を学ぶ中で、当時の先進的取組事例であった市民参加型「世田谷まちづくり」を目の当たりにしていた。それを踏まえ1999（H11）年に岡崎市での奈良井公園改修に当たり地区住民参加のワークショップを実施し、市公園緑地課に提案したのが最初の岡崎まちづくりへの関わりであり、それに基づき公園計画案が策定（2001年）された。当然の事ながら岡崎市職員とも関わりを持つようになり、現在の礎ともなる。岡崎市役所では、当時熱意のある有志によって「シンクタウン」という学習会があったそうで、彼等とのパイプが後の「りた」にも繋がるという。

● **設立時以降** … 三矢氏は、「りた」設立準備段階（2004年）から関わっており、天野氏は、2007年から「りた」に加入した。三矢氏は現在も「りた」に関わっており、事務局次長を務めている。（今回の取材時も直前まで二人が打ち合わせをされていたのが印象的である。）
なお、「りた」の設立、その後の活動内容については、歴代市長のポリシーともうまくマッチし、三矢氏、及び天野氏の目指す「市民参加のまちづくり」が活かされている。前市長の柴田紘一氏（2000－2012）は、市民協働を公約として掲げ、市内地域交流センターの整備を進めると共に、それを運営するための公設民営組織として「りた」を設立した。次の内田康宏市長（2012－現在）は、乙川リバーフロント整備推進をポリシーとし、「りた」がその協働・共創の主体的な役割を果たすこととなった。
ちなみに、「りた」が設立された2006年の1月には、岡崎市は旧額田町を編入し現在の市域となっている。このことで乙川が岡崎市内で完結する流域となり、額田域の森林も含め岡崎市の地域固有財産となったとも言える。

● **「新しい公共支援、新たな公共の担い手としてのNPO」以降** … 公設民営組織「りた」は、設立後、岡崎市協働の分野業務を様々受託してきた。市民参加は順調に進められてきたものの、「行政が主導する市民参加の限界」を感じていた頃、2009（H21）年の政権交代で「新しい公共支援」という提言がなされた。新たな公共支援の担い手としてのNPOの意義を再認識するものであり、「りた」にとっても一つの転機となった。まず2011（H23）年に取り組んだのが、空洞化が進んでいた岡崎市松本町・松應寺横丁の再生であり、花街として栄えたレトロな魅力を地域資源として活かしながら拠点「松本なかみせ亭」の開設、空き家を活用し新たな店舗の展開などを進めて行った。空き家改修には、愛知県「新しい公共支援事業」が充てられた。また、この地区は「あいちトリエンナーレ2013」の会場にもなった。「地域を元気にするために地域資源を活用する」まちづくりのスタートとなる。
そして、乙川リバーフロント地区整備が始まり、「りた」が市民と共に「新たな公共」の推進者としての役割を担うこととなる。

連携している団体・専門家・自治体など

- 当然のことながら岡崎市（各部局職員）、市民・市民団体、まちづくり専門家など多岐にわたる
- 額田木の駅プロジェクト 唐沢晋平 事務局長（天野さんは「もっと上流域と連携したい」とのこと）
- 橋の下舎 永山愛樹 さんとは、旧知の仲とのこと（「川は僕らの実験場」は二人の共通フレーズです）

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動 社会実験「おとがワ！ンダーランド」①

（＊この項目は取材の他、2018年2月5日に開催された「MIZU中部セミナー2018」での天野さんの講演を聞き、収録しています）

乙川リバーフロント地区において、公民連携まちづくりモデルを創ろうというのが「おとがわプロジェクト」。その中で国が進める「かわまちづくり」の一環として、協議会が乙川河川敷を一括して占用できるようになり、営業活動などを含めた様々な試み（実験）が出来るようになった。これが「おとがワ！ンダーランド」であり、2016（H28）年より開始した。乙川河川敷は春の花見と夏の花火大会だけは大勢の人々がやって来るものの、それ以外は閑散としているとのこと。魅力的な空間を創ることで水辺と人を日常的に繋げ（地域資源を活用し）、岡崎市を中心市街地を元気にする。乙川の上流・額田木材も使いながら流域も繋げる、などの社会実験を展開した。オープンカフェやビアガーデンなど多彩なプログラムを展開、2016年、2017年と実施したが、社会実験であるため昨年度の課題も踏まえ、今年度は、公募期間、開催期間（日数48日→196日）、プログラム内容など大幅に変更しチャレンジしている。

河川利用に関する以下の課題を踏まえて、社会実験・練習としてはこれを打破する新たな試みを展開した。

●**せっかく規制緩和したのに使ってくれない** ➤ 日常と川との接点をつくる必要があり、誘いとしての「殿橋テラス」を橋のたもと空間に設置し、通行人に立ち止まってもらう。河川敷に気軽に佇んでもらうため、ヒノキ地産材を使った縁台「乙床」を配置し、いずれも心地よい空間づくりを試行した。

●**いざ使おうと思っても使いにくい** ➤ 「かわまちづくり」で規制緩和されたとは言え、河川利用に関しての条件、ハードルはまだ高い。公共空間であり、守らなければならない事は存在する。これから誰もが利用できるように、このルールと手続きをわかりやすく解説したルールブックを編集する。

●**使ってもイマイチ盛り上がらない** ➤ この場所ならではの使い方を磨いて行く。「乙床」のような日常的な使い方が鍵であり、そのため2017年度は期間を7月20日から1月31日までの長期間を設定した。プログラム数も昨年度より微増の41であるが、イベント的な取組から朝市や星空観望会、乙川リバークリーンなど中継続的に実施される日常的な取組を重視した。

今後やってみたいこと(既にいろいろチャレンジしている最中ではあるが…)

同じ岡崎市である乙川上流域(額田地区)との連携をさらに深めたい。

取材者(近藤)あとかき ……流域圏の担い手づくりに向けて

今回「りた」取材に私が手を上げたのには理由がある。ここ数年、岡崎市がとても元気である、市職員も活気があると感じていて、私が1997—1998年に愛知県岡崎土木事務所に勤務していた頃と比べて随分と変わってきたように思う。当時乙川には既に噴水、潜水橋(もぐり橋)はあったが、それ以上のアプローチをしようという雰囲気はなかった。岡崎市が活性化した理由の一つは「りた」の存在ではないのか？取材後、確信に変わった。

「おとがワ！ンダーランド」に関しては、規制緩和されたとはいえ、河川管理者である愛知県との協議が重要となるが、天野さんたち「りた」が直接交渉の場に参加することはないという。岡崎市が一元的な窓口となり県との交渉に臨んでいるとのことで、(前例がないような提案が多いのに)これが可能なのは、「りた」と岡崎市が概ね同じ方向を向いているという証である。実は私、この12月24日に「ブラアイチ」という県企画で乙川周辺でのまちづくり・歴史案内イベントを岡崎市職員の方々、まさしく乙川リバーフロントに関わる様々な部署の人たちと共に実施したのであるが、皆前向きで元気だった。乙川に関して市と「りた」との二人三脚は良い効果を生み出していると感じた。また、「おとがワ！ンダーランド」の多様な内容は、行政だけでは決して出来ない内容だろう。

「りたは中間支援団体だから中立性が求められる」と仰っていたが、天野さん、三矢さんは良きコーディネーターであると共に、まちづくりの専門家でもある、かつ若い。このような市民が協働、専門性両方の観点から行政を補完し、強力な推進力となっているのが今の岡崎市の「新しい公共」乙川モデルであろう。

今までの山村担い手調査では、危機感を持った山村に若い人材、よそ者も入り込み、世代も越えて新たな取組を模索している状況を垣間見てきたが、都市域・河川などでは難しいのだらうと思い込んでいた。今年度、山村から流域圏へと調査範囲を広げ、私が出会ったのは、「りた」の他、橋の下世界音楽祭の永山愛樹さん、木かんしゃの庄司知生さん、ちんちゃん亭の鈴木夫妻などで、皆若かった。また天竜川船頭の曾根原宗夫さん、下山の倉知雅博さんなどが真剣な地元戦略を展開されていた。前述「ブラアイチ」で出会った岡崎市職員も皆魅力的で、とりわけまちづくりデザイン課の木下政樹係長は印象深い。彼等から何となく「流域圏の担い手」づくりのイメージが見えてきた気がする。若者であったり民間人であったり、多様な背景を持つ世代が、既存概念にとらわれない多様な手法と真剣なエネルギーによって地域を創ることが、これからの鍵となる。行政を頼りすぎず、批判ばかりせず、むしろ自分たちが実践し行政を引っ張って行こうという気概を持つことが「新しい担い手」像だろうか。(これは私が出会った人たちの共通項を並べただけである。)



岡崎市「りぶら」にて取材風景 （2018年1月16日）



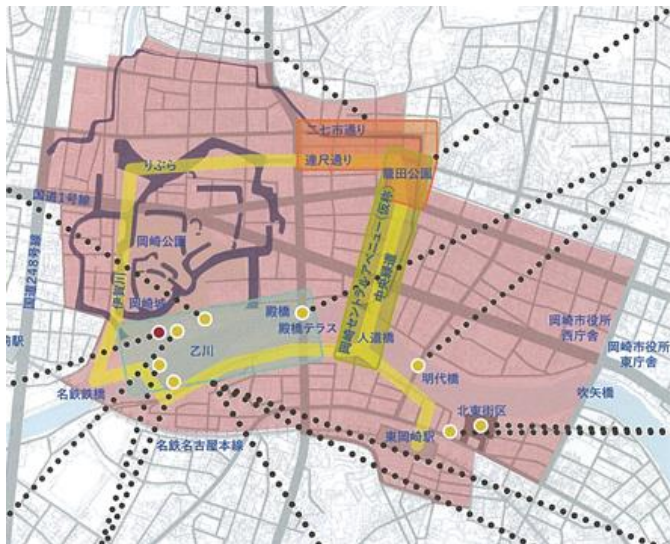
岡崎市松本町・松應寺横丁の再生 次は乙川だ！



「M I Z U 中部セミナー2018in岡崎」で
乙川を語る天野さん（2018年2月5日）



松應寺横丁 なかみせ亭など



Q字の回遊動線をQURUWA（くるわ）として設定
『おとがわプロジェクト中間報告』より



建設の進む将来の人道橋付近の様子
殿橋より乙川上流をのぞむ（2018年1月16日）



額田地域の活性化を目指した「ねかたのマルシェ」（2017年11月20日、25日の記事より）
おとがわ！ンダーランド (<https://www.facebook.com/otogawanderland/>)



夜の殿橋テラスと乙川ナイトマーケット（2017年9月23日の記事より）
おとがわ！ンダーランド (<https://www.facebook.com/otogawanderland/>)

NPO法人森を再生する会

調査団体名 : 森を再生する会
 設立年 : 2002年4月12日
 団体URL : <http://econetanjo.org/>
 活動拠点 : 矢作川水源地域の設楽町・根羽村
 取材日 : 2017年12月11日

団体代表者名 : NPO法人森を再生する会
 (兼NPO法人エコネットあんじょう) 理事長 神谷輝幸
 対応してくれた人の名前 : 神谷輝幸
 取材者 : 浅田益章 沖 章枝
 レポート作成者 : 沖 章枝

活動内容 :

生態系豊かな森が育む命の水は中流域・下流域を潤し海の恵みを与えてくれていた。しかし、ずっと森を守って生きてきた山村の人々は木材価格の低迷等によって山を見捨てざるをえず、過疎の村が広がってきている。水源の森づくりは本来市町村や県、国の事業として行うことが理に適っているが、山が危機的な状況であることや水資源が貧弱になっていることを実感して、ただ待つのではなく水の利用者である中・下流域住民で気づいたものから行動を起こさないと手遅れになると思った。

この15年間の活動

◆持ち主の賛同をいただいた山で広葉樹の植樹
 ◆矢作川水源のスギ・ヒノキ放棄林2haを購入し、針葉樹を伐採・搬出。そこに本来その土地に生えている潜在自然植生木の広葉樹を植樹
 ◆春秋に植樹祭 ◆記念講演会 ◆チェンソー講習会 ◆自然観察会
 安城市街地や旧作手村、東浦町の『いのちの森植樹』も含めて合計で13,000本の木を植えることができた。

2017年度の活動

◆5月、6月 巻きがらし間伐 ◆7月 設楽町の「千年の森」にて自然観察会
 ◆8月、9月 間伐 ◆10月 植樹&獣害防止ネット設置 ◆11月 ドングリ蒔き
 ◆12月 間伐したヒノキでまな板を作って参加者に配布

会員 約100人余 年会費一人2000円

事業はイオン環境財団、あいち森と緑づくり事業、国土緑化推進機構の助成金で運営している

キャッチフレーズ :

森は命！水源の森を守ろう！生態系豊かな水源の森づくりをして次世代に渡していこう！

会のモットー（何を大切にしているか） :

行動をすることで森づくりの大切さを市民に広めたい。

流域は一つ、運命共同体。水を利用するものは水を作れ（安城初代町長岡田菊次郎の言葉）

設立から現在に至るまで変化したこと:

- ・2000年、生態学者宮脇昭先生の『ふるさとの木によるふるさとの森づくり』に感銘をうけて、安城市民会議環境委員会にて『市民の森づくり』を提案。都市部で実践しようとしたが、都会化していく市街地で植樹場所などの問題が出てうまく進まなかった。それならば、戦後拡大造林政策で山の頂上までスギ・ヒノキが植林され、手が入らず荒れている山を再生させようと行動の転換をした。この頃、設楽町の知人から「自分の山を使って水源の森づくりをしないか」と申し出があり、広葉樹の植樹を始めた。
- ・2002年、『森を再生する会』を設立。翌年NPO法人認証
- ・2010年、矢作川水源の設楽町のスギ・ヒノキの放棄林2haを購入し、以後、針葉樹の伐採と搬出、広葉樹の植樹。
- ・2015年3月 根羽村の森林36haの購入の覚書が安城市と根羽村の間で交わされた。
- ・2017年8月 安城市市議会へ『安城市の水を確保するため、水源涵養林の保全に資する基金の設立を求める請願』をし、全会一致で可決された。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源活用など):

下流域の人が「水源地だから大切に」と思っている、上流域の人は水源地というだけでは生活ができない。人的物的な交流と取り組みが必要になる。
イベントに招待して根羽村の根羽杉製品の紹介や物産展を開催している。

現在直面している課題:

市議会で「安城市の水を確保するため、水源涵養林の保全に資する基金の設立」が認められたとはいえ、市民も役所も完全に理解しているとはいえない。水源の森づくりのための基金が用途が違ふものに使用されるようでは意味がないものになる。正しい理解をするためのネットワークと広報がいると思う。

今後進めたいこと:

安城市の水利用は、表流水70%、地下水30%で地下水の利用率が高い。地下水を使いすぎれば地盤沈下の問題も起きる。経済的コストではなく環境面への視点と配慮が広がるようにしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か:

常任的なアドバイザーはいないが、毎年講演会を開催している。宮脇昭先生や気仙沼上流の山に牡蛎の森をつくった畠山重篤さん、日本熊森協会会長森山まり子さんなど講師として招いた方と連携しながら情報を頂いている。講演会に参加した人たちとも繋がって大きくなれた。これからも人と人とのつながりを大事にしたい。

チームオリジナルの質問:

<質問内容>

水源地根羽村との上流・下流の連携を教えてください

<答え>

根羽村と安城市の関わりは明治用水に始まって歴史的が長い。

根羽村の森林36haを購入することになって『矢作川水源の森トラストプロジェクト』が設立された。

6回目を迎えた『矢作川水源の森トラストプロジェクト フォーラム2018』では、基調講演として横浜市水道局の温井浩徳氏から、横浜市が水道水源として村有面積の36%を確保する山梨県道志村の『道志水源の歴史と取り組み』が紹介された。パネルディスカッションで根羽村村長や森林組合参事とも意見交換をした。

チームオリジナルの質問:

<質問内容>

『森を再生する会』『エコネットあんじょう』『矢作川水源の森トラストプロジェクト』3つの団体の違いは何ですか

<答え>

森を再生する会は、水源の森をつくること、守ることを目的として行動をしている会。

エコネットあんじょうは、安城市内の環境団体が集まることで、市内の環境問題を行政と企業、市民が協働で解決することを目的に結成された。

矢作川水源の森トラストプロジェクトは、エコネットあんじょうの事業の一つで、市民が主体となって根羽村の森林36haを購入することによって、安城市民の飲料水等良質な水を確保するに必要な水源涵養林を作る活動。

その他、伝えたいこと:

以前に比べると少なくなっているが、安城市には湧水が豊富にあった。
水源地の根羽村と安城市の落差は1000m近くある。降った雨は地下水になって1日1m下るといわれている。根羽村の地下水が安城市に届くには252年かかることになる。みんながあつて当たり前と思っているけれど、水めぐりの恩恵は深い。こうしたことも多くの人に知ってもらいたい。

写真

取材風景（2017年12月11日）

① 森を再生する会 理事長 の神谷輝幸さん

安城市のデンパーク公園に隣接した駐車場にあるNPOエコネットあじょうの事務所を訪ねた。
（愛知県安城市赤松町梶63番地1）

植物生態学者の宮脇昭先生の理論に基づいた植樹を行っている。「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」「命の森を伝えたい」



活動状況



② 事務所はデンパーク公園のそばにある



③ スギ・ヒノキの放置林を購入、伐採。 広葉樹の植樹活動で水源の森づくり （ブナ、ミズラナ、アカガシなど） 26種類以上の広葉樹を植えている



④ 「水と木の実と動物の楽園を作ろう」

安城市から遠く離れた設楽町の水源の森づくり



⑤ 【水をつかう者は自ら水をつくれ】 2018年1月27日(土)アンフォーレで 「矢作川水源の森トラストプロジェクト・フォーラム2018」開催チラシ。 安城市と根羽村の人的物的交流と市民のための水源の森づくり

環境ボランティアサークル亀の子隊

調査団体名 : 環境ボランティアサークル亀の子隊
 設立年 : 1999(H11)年12月
 団体URL : <http://kamenoko.org/>
 活動拠点 : 愛知県田原市渥美 西の浜
 取材日 : 2017年12月26日

団体代表者名 : 鈴木吉春
 対応してくれた人の名前 : 鈴木吉春
 調査員 : 高橋伸夫、服部朋悦
 レポート作成者 : 高橋伸夫

活動内容

校区の西側に位置する西の浜に打ち上げられるゴミの清掃が目に見える活動ですが、単なる海岸清掃だけが目的ではありません。子どもたちの自発的活動の意思を尊重し、西の浜を見つめなおすことで校区の自然に目を向け、ゴミのない美しい浜にするという活動を通して、地域と自然を愛する心を育てることを目的とした活動です。体験的環境学習としての「海の環境を学ぶ会」も行っています。

キャッチフレーズ

思いが広がる、思いがつながる～きれいな海をまもるためのプロジェクト

会のモットー(何を大切にしているか)

「子供たちの主体性を大切にしている。」

活動に来てても細かな指示はせず、ごみ拾いに来てても、海が楽しいので海で遊ぶ。遊んじゃう。それが一番大事。そうやって海のよさも知ってもらい、反対に「ごみもあるじゃんね」「そうだね」と言って理解し行動する。そういった子供たちの主体性を大事にしたい。

設立から現在に至るまで変化したこと

最初は小学校授業の総合学習で始めました。

子供たちにふるさとを愛する心を育てたいというのが奥にある目的で、ごみを拾う活動でした。

ごみ拾いしているだけでは、「海」、「西の浜」はきれいになっていかない、それで、いろんな人たちとつながる必要があると考え、1回100件ぐらい手紙作戦を、愛知県、三重県、流域の企業さんへ出して、いろんな組織に声をかけ、組織に入って、そこからヒントをもらって亀の子隊の活動の中に取り入れてやってきました。

変化というよりも、だんだんだんだん幅が広がってきたという感じです。

連携している団体・専門家・自治体など

渥美青年経済研究会、渥美釣りクラブ、第4管区海上保安本部蒲郡保安署、休暇村伊良湖、田原市役所関係部署、田原市社会福祉協議会、田原市ボランティア連絡協議会、渥美NPO、国土交通省中部地方整備局(三河港湾事務所ほか)、福江高等学校、福江中学校ドリームの会、豊川市佐奈川の会、西尾市社会福祉協議会、豊田市アド清流愛護会、豊田市矢作川研究所、愛知県環境部資源循環推進課、東三河農林水産事務所、名古屋汽船(株)、グリーン海事(株)トヨタ紡織(株)、リコー中部(株)、長坂(株)、CNAC(全国海に学ぶ体験協議会)、渥美半島生態系ネットワーク、他

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

渥美半島環境活動協議会というのをつくって、渥美半島で環境活動している人たちが緩やかに寄ってきて、いろんな渥美半島の中の課題を見つけて、みんなで相談し合いながら解決していくことを行っています。

今年は、若者ミーティングを行い、30代の青年会議所や、渥美の青年経済研究会のメンバーを呼んで話し合いをしました。その中で、「渥美半島のことをあまり知らない」「環境問題も知らない」など意見がありました。

ただ、漁業や農業に携わっている子たちは、「漁獲が減っている。魚種が減っている。」農業も「全国的には無農薬でやってきているところが増えてきているのに、渥美半島はいつまでたっても農薬をばらまいている。」などの話の中で、それらの影響とか話題はわかっているのに、もっと意識づけをしていかなければいけないと思っています。

現在直面している課題

やっぱり人、スタッフです。参加者は多いのにスタッフが少ないので、もう少し多くのスタッフが必要です。

参加者の数は、西の浜のこのごみクリーンアップ活動などでトヨタ自動車の田原工場さん、豊田紡織さんの豊橋工場さんとかも来てくれて、今年1,600人ぐらい来てくれています。企業の力は大きいです。学ぶ会はほとんど地元の子たちですが、毎年延べ200人を超えています。

また、他に資金も不足気味です。

今後やってみたいこと

エコツアーを多くやりたいです。海をきれいにするという思いを広げて、伊勢湾流域圏の上流域の人たちに伊勢湾の実情を知ってもらいたい。

伊勢湾上流域の人たちに来てもらって、現実の西の浜の姿を見て、考えてもらう必要があります。ごみ拾いだけでなく、プラスしてエコツアーということで学ぶ会として行っている「タッチングプール」や「海水からの塩づくり」を体験してもらいたいと思います。

実は去年までに3回実施しており、今年も2回実施しましたが、そんなエコツアーを拡充していければよいと思っています。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまでも豊田市の団体との繋がりが多く参加がありましたが、最近は絶えています。上流域との繋がりが情報を得るためには矢作川流域圏懇談会のような団体は有用だと思います。また、エコツアーには大学生の参加も多く欲しいので大学との繋がりも必要だと思います。

その他、伝えたいこと

西の浜にも建物「ネーチャーセンター」が欲しいです。

管理ができて、道具も置いて、目の前ですぐ出してごみ拾いも常時活動できる場所。

この施設で天然ゴミの流木や草本をエネルギーとして利用できればなお良いと思います。

チームオリジナルの質問

<質問内容>団体名の由来は？

<答え>亀山小学校の子供たちの活動、亀山の子…から「亀の子」隊と名付けました。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞活動のきっかけと経過は？

＜答え＞1998(H10)年、当時、亀山小学校4年生が西の浜に出かけたときにあまりのゴミの多さに驚き、ゴミを拾い集めました。「最終処分場よりもひどい！」「西の浜はゴミ箱じゃない！」と怒りの声を上げ、子どもたちの総合的学習の中で、『西の浜はゴミ箱じゃない！』をテーマに、西の浜をきれいにするために自分たちができることを考えようと学習を始めました。

学校活動と区別するため、子どもたちの自発的活動の意思を尊重し、周囲の組織にとらわれることなく活動ができるように、サークルを立ち上げるための話し合いを子どもたちと行い、『環境ボランティアサークル 亀の子隊』として活動をすすめることになりました。平成11年12月、渥美町の社会福祉協議会に「環境ボランティアサークル」として正式に登録をしました。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞初期とは違う、ということが何かありますか？

＜答え＞1998年(H10年)、当時、亀山小学校4年生が西の浜に出かけたときにあまりのゴミの多さに驚き、ゴミを拾い集めました。「最終処分場よりもひどい！」「西の浜はゴミ箱じゃない！」と怒りの声を上げ子どもたちの総合的学習の中で『西の浜はゴミ箱じゃない！』をテーマに西の浜をきれいにするために自分たちができることを考えようと学習を始めました。

学校活動と区別するため、子どもたちの自発的活動の意思を尊重し、周囲の組織にとらわれることなく活動ができるように、サークルを立ち上げるための話し合いを子どもたちと行い、『環境ボランティアサークル 亀の子隊』として活動をすすめることになりました。平成11年12月、渥美町の社会福祉協議会に「環境ボランティアサークル」として正式に登録をしました。地域外のイベントに呼ばれるようになってきたことです。

初めの5、6年はありませんでしたが、愛知万博から、全国ボランティアフェスティバルとか東三河のボランティア集会などに何度も呼ばれています。

当初は、西の浜のごみを拾う活動やごみを減らす活動だけでしたが、活動の流れの中で外部の方から認知をいただいて...うちにも来てその活動をと声を掛けていただくようになりました。

会として積極的に情報共有とか情報発信をするようになったことが、変わってきたことです。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞隊員構成は？

＜答え＞2017(H29)年度 隊員数94名

- ・亀の子隊 50名(内 1期隊員14名含む)
- ・親亀 12名 亀の子隊員の保護者の中で活動を支援・協力される方
- ・賛助隊員 23名 活動資金(年間3000円以上)援助をされる方
- ・支援ボランティア 5名 事務局の手伝いをされる方や毎月の活動に参加される方(不特定)
- ・事務局 4名

写真





取材者名

浅田益章

今村 豊(根羽村森林組合)

内田雅之(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

大重隆太郎(岐阜県恵那農林事務所)

沖 章枝(水と緑を守る会・岡崎)

小島徳文(岐阜県恵那農林事務所)

近藤 朗(愛知・川の会)

清水雅子(愛知・川の会)

庄司知生(合同会社木かんしゃ)

洲崎燈子(豊田市矢作川研究所)

曾我部行子

高橋伸夫(西三河野鳥の会)

中田 慎(アジア航測)

野田賢司(矢作川環境技術研究会)

服部朋悦(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

浜口美穂(ライター)

松井賢子

松山康忠(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

水谷裕子(家畜除草研究会)

三ツ松由有子

山本薫久(NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター)

山本孝之

山本幸泰(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所))

吉橋久美子(豊田市矢作川研究所)

(五十音順)